

## 翻 訳

## 李鴻章と海軍の発展（1875～1885）

原著：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*,  
chap. IV, pp. 63-95, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン

訳：細見和弘

満洲族の統治規則に背いたとはいえ、1874年に自分の甥をむりやり皇帝〔光緒帝〕にすることに成功した時、西太后の地位は強められた。この時から1908年に亡くなるまで、西太后は宮廷内で権力を持ち続けた。また李鴻章も、1870年代に権力を得た。1870年から1895年まで北洋通商大臣と直隸総督を兼務した李鴻章は、前例のない在職期間を既に開始していたのである。李鴻章の出現した由来は、政治的な巧妙さ、私的軍事力、進歩的な思想、彼の官衙や近代的ベンチャー事業を通じて蓄積された富に帰することが出来る。李鴻章は、彼の指揮の下に海軍を建設することに関心を持つようになった。李鴻章の権力は、海軍建設過程を統一するには充分でなかったにせよ、李以外に海軍の建設を進めるすべての後援者にとって次第に重要な競争相手となっていた。太平天国期以後の中国で得た政治的・制度的地位を考慮すれば、この強力な人物のもつ影響力は、おそらく海軍の活動にとって都合がよいというより有害であったであろう。

北洋大臣李鴻章は、南洋大臣の管轄区域においてかなりの影響力を持っていた。その場所で李鴻章は、1870年以前に幾つかの高い地位を務めていたからである。時として、この影響力は、南洋大臣自身を通り越して及ぼされた。北洋大臣と直隸総督の官職を一つにまとめるという取り決めにより、1870年に李鴻章は華北での権力を高めた。天津海関道に従属する官衙を操作することを通じ、関税資金、海防、天津機器局に関する管理を自分の手中に引き寄せた。1860年代に、中央政府は、旧き満洲八旗と緑営〔各省に設置された地方正規軍〕を維持する一方で、練軍を組織した。そして、李鴻章の准軍のような私的軍隊と同様に、外国人により訓練されたこの部隊に〔満洲八旗と緑営を〕吸収することを計画した。李鴻章は、競争相手の直隸練軍を排除できなかったが、彼自身に忠実な者を潜入させた。そして、李の准軍部隊は、直隸で既成の満漢正規軍に広く取って代わった。しかし李鴻章は、清朝に忠実であった。李鴻章の主要な競争相手は、福州船政局〔福建船政局や馬尾船政局とも呼ばれる〕の創設者である左宗棠であった。

1874年の台湾危機〔征台の役〕の間とそれ以後、中国海軍を統一するために、更に進んだ試みがなされた。今やそれは、南北洋大臣が購買した船に加え、福州船政局で建造された中国製の船や他の諸省に属する混成艦隊をも含んでいた。1874年末、長らく李鴻章と連携していた丁日昌は、天津に山東と直隸を監督する北洋提督を置き、呉淞に浙江と江蘇を監督する東洋提督を置き、廈門に広東と福建を監督する南洋提督を置くとする、北・東・南の三洋体制の必要性を力説した。各提督は、6隻の近代的大型船と10隻の近代的小型船を指揮し、年に一度の合同演習では、48隻から成る艦隊が集められることになる。署山東巡撫文彬は、その3人の将領には、李鴻章、

彭玉麟（太平天国との水軍戦において曾国藩と連携した）、沈葆楨が就くとし、全中国の海軍長官の下に従属すると献策した。<sup>2)</sup>

李鴻章は単独で海軍を指揮するのが望ましいと考えたにもかかわらず、丁日昌の提起した三洋体制を支持した。丁日昌は、自分が単独で海軍主席になることに確信を持てなかったが、江蘇において影響力を享受しており（1862～1865年に江蘇巡撫、1865～1866年に両江総督、そしてその当時、江南製造局を管理した一人であった）、丁日昌の計画が海軍の目的のために閩浙〔福建と浙江〕を分断し、浙江と江蘇を連結することを説いていたので、たとえ非公式ではあっても、彼はその体制を左右したであろう。<sup>3)</sup> 1875年、北洋大臣に北洋沿岸を防衛する責任が追加されたにもかかわらず、丁日昌の案は採用されなかった。「李の部下」である丁日昌が総督職を賞与された1879年になってはじめて、南洋大臣が同一の権利を受け取るようになったのは興味深い。

1875年の春、北京は海防経費を創設した。それは、洋税収入から留保された4割の半分から成っていた。この海防経費は、北洋と南洋に分割されることになっていた。<sup>4)</sup> 1870年代末、沈葆楨は、南洋大臣より先に北洋大臣が海軍艦隊を購入することを促した。すなわち、海防経費の全額がさし当たり李鴻章に送金されるということであった。この優先権は、うまく機能しなかった。<sup>5)</sup>

沿海部の艦隊は、組織化が貧弱であり続けた。1879年（その年に日本は琉球を領有した）、吳淞に海軍司令部を創設することに関する議論があった。海関のロバート・ハート（Robert Hart）が海軍主席になるということであったが、李鴻章と沈葆楨がそれを阻止した。<sup>6)</sup> 1881年に海軍が統一されていないという問題は、「中国人」ゴードン（「常勝軍」のチャールズ・ゴードン Charles Gordon）により李鴻章に与えられた助言の中に反映されていた。ゴードンは、海軍大臣が創設されるが（そしてその職は、おそらく李鴻章の下にある）、自分自身は陸軍問題に関与すると提言した。<sup>7)</sup> その提言は何ももたらさなかった。

1883年、中央政府は、ロバート・ハートに対し海軍監督（naval director）の地位に就くよう再び申し入れた。ハートは、次のように書いた。

彼らは衙門で、もし私が絶対に中国を離れないか、或いは少なくとも5年間動かずに留まることを決心すれば、私が7、8年前に彼らに与えた忠告を容れて海防衙門が海防本部を設立し、私を海軍総監（Inspector-General）にすると私にはほめかした。もちろん彼らがこのことを実行したなら、私は5年間で彼らの海軍を本当に立派なものにしただろう。このような何か大きな事を実行するチャンスを逃したのはとても残念だし、その仕事が他人の手にわたるのを見るのは、もっと残念なことだ。もし私が踏ん張らなければ、そうになってしまいそうだ。

ハートに対する宮廷の申し入れは、おそらく李鴻章の力を抑制するために立案したのであろう。李鴻章は、ハートと次第に不和になっていたからである。ハートは、李鴻章が、ドイツ人の天津税務司グスタフ・デトリング（Gustav Detring）に影響されすぎはしないかと懼れた。そして、疑いなくハートの表明の中における空白の一つは、「ドイツ人」という言葉のために空けられていた。他の空白は、おそらく「アメリカ人」という言葉のために取っておかれた。当時、李鴻章は、米海軍のコモドア・ロバート・シューフェルト（Commodore Robert Shufeldt）に関わろうとしていた。彼は、李鴻章の北洋艦隊を訓練していた際、天津で米韓条約を締結した人物である。<sup>8)</sup>

ハートは、少なくとも海軍大将 (admiralty) という着想を支持した。そして、その首席として光緒帝の父醇親王奕訢を推薦した。その間、李鴻章は、広東に行って安南で次第に高まりつつある対仏危機に対処するよう命じた諭令を受け取った。雲南と両広〔広東と広西〕の全軍は、李鴻章の指揮の下に置かれるようになった。つい先頃、左宗棠がトルキスタンでの勝利から帰還していた。にもかかわらず、宮廷は、この任務を割り当てるに際して、左宗棠を避けた。

1884年の初め、李鴻章は、ただ一人の海防司令官を設ける必要性を総理衙門に再度力説した。李鴻章は、そうした地位が地方官に対し過度の権力を与えることになるのを認めたものの、彼自身を候補者として推薦し、その新しい海軍官庁を北京に在る総理衙門の構内に置くよう提議することで反対を封じ込めた。ともかく、北洋大臣李鴻章は総理衙門の一員であり、天津における彼の地方基盤は北京に近いので、地方での責務を果たすことが出来た。著名で進歩的な郭嵩燾の眼でみると、これは現実的な提議であった。郭嵩燾は、北京だけに基盤をもつ艦隊司令官は孤立するであろうと考えた。しかし、海軍本部は設立されなかった。<sup>10)</sup>

清仏戦争以前、この方向にそったもう一つの試みがあった。総理衙門の一員である張佩綸は、西洋の海軍制度を研究し、中国海軍が「一つの家族のように」なるように、ただ一人だけの海軍大臣を求めた。張佩綸は、つい先頃李鴻章の個人的な秘書になっており、おそらく彼の昔からの上司が新しい海軍大臣になることを望んでいた。恭親王奕訢はこの考えに賛同し、宮廷内で李鴻章が適任であるとのほめかした。しかし恭親王は、フランスとの間で起こった問題で不適切な発言をしたため罷免され、この最後の計画もつぶれた。<sup>11)</sup>

李鴻章にしても宮廷にしても諸艦隊を統一できなかったのであるが、一つになったものもあった。コモドア・シューフェルトは、名ばかりの二人の海防大臣の下に置かれた四つの「明瞭」艦隊を数えた。我々はむしろ、清仏戦争の前夜に、たった四つの近代的艦隊しか無かったと言ってよいのかも知れない。南京の小型艦隊は、李鴻章の艦隊より巨大であったが、李は南に影響力を持っていた。<sup>12)</sup> 戦争が発生したとき、左宗棠はもはや南京にいなかった。李鴻章は、南洋の海岸に沿って独自の情報源を持っていた。戦時中、福建海防長官〔会辦福建海疆事宜〕は、張佩綸であった。李は中国の近代的艦隊の間で、非公式の協調 (coordination) を成立させていたのかも知れない。

1884年に強い皇帝が存在していたなら、海軍の統合は実現していたかも知れない。しかし西太后は、卓越した指導者ではなかった。恭親王に代わって、醇親王が皇帝の筆頭顧問の地位に就いたが、醇親王は不慣れであり、あらゆる出来事に関して西太后に依存しすぎた。

それでも清朝は、地方諸政府の単なる群れに解体されていなかった。あまりに多くのものが、太平天国後の地方分権化をつくり上げる可能性があった。皇帝に対する忠誠は、残っていた。そして皇帝は、処罰権を失ってはいなかった。しかしながら、否定的な処罰は、指導力にはならない。王朝の政治構造は濫用された。中国の督撫層 (regional and provincial leaders) の間で競争が行われる余地は、比較的多かった。

この時期にこれらの指導者が互いに競い合える事柄は、数多く存在した。海軍の船と材料の購買は、その一つであった。曾國藩と左宗棠は、中国が自力で船を建造することを望んだが、他の者は同意しなかった。外国人の代理人が彼をだますことを懼れたとはいえ、両広総督瑞麟は、1860年代後期に英・仏から6隻の小型砲艦を購入した。沈葆楨の後任として福建船政大臣となっ

た丁日昌〔任期は1875年12月～1878年5月〕ですら、外国製の船の方がより良質で安価であるとして同じ意見を持った<sup>13)</sup>。

中国が自国の軍艦を購入すべきか建造すべきかは、重要な問題であった。中国は、確かに究極的な海軍の独立に向けて進むべきであった。しかし、直ちに自国の造船所を全面的に当てにする必要はなかった。とりわけ防御艦隊を創設する必要はなかった。購買と建造を上手く混ぜ合わせるのも可能であったろう。しかし、宮廷は政策を策定しなかった。そして決定は、多様な考え・地位・利害をもつ人々によってなされた。決定は、勢力を有する競合者によってなされた。艦隊の統一と標準化は、達成され得なかった。

1870年代になる以前、李鴻章は、陸軍力〔の増強〕に余念がなかった。そして、李鴻章の戦略思想は非常に伝統的であったので、1870年の天津教案<sup>14)</sup>に際し、運河北岸に城壁を築き、沿岸の防御を強化することを唱えた。外国製の船に対する李の関心は、1872年に輪船招商局<sup>15)</sup>を創設し、そのために英国船を使用したとき高まった。既に見たように、1874年の危機の際、当時、外国製兵器は3倍の値段が付けられ、その上1876年になってはじめて船が手渡されたにもかかわらず、沈葆楨ですら2隻の米国製砲艦を購入した。ロバート・ハートは、外国製兵器のため諸省の関税収入により少しずつ金額の支払いに関わり、軍需品の購買を中央集権化しようとした。ハートは、船や兵器を製造するよりも購買することを奨励した。その過程を制御できると決め込んでいたのは、疑いない。

1874年の台湾危機は、多くの防衛策の献上をもたらした。港湾の防御工事を強調する点で、大部分は伝統的なものであった。しかし、大型船を提議したのは、二、三件に過ぎなかった。強調されたのは、外国製材料の購買に関してであった。台湾危機で意気消沈した文祥<sup>16)</sup>も、船を購入する必要性を力説した。皇帝は、南洋大臣李宗羲<sup>17)</sup>と北洋大臣李鴻章に対し、速やかに資金を集めて、武装船、モニター艦、他の武器を購入するよう命じた。その動作は堂々としていたが、ほとんど理解を示していなかった。

上述した、三つの防衛区域〔北・東・南の三洋〕に48隻から成る海軍計画の中で示されたように、李鴻章は6隻の巡洋艦と数隻の小型船を欲した。資金は（左宗棠が当時駐在していた）華西から持ち出すこと、軍隊は食糧を沿岸の土地から調達して資金を節約すること、北京に送られる四成洋税〔洋税の40%〕は、総理衙門や沿岸の諸官僚に割り振り、海防のために使えるようにすること、そして伝統的な陸軍と水軍は排除されることを力説した。

李鴻章の動機は何であれ、王朝の財政を合理化する必要があった。1874年の危機が最高潮に達した時、北京は円明園<sup>18)</sup>の再建計画で混乱していた。恭親王奕訢は、莫大な費用がかかるとして反対し、記念日（1874年9月10～11日）に免職させられた。彼は次のように訴えた。

私が総理衙門を引き継いで以来、軍隊を訓練し、資金を調達し、機械や船の製造を教えようと試みてきた。これらの問題の幾つかについて、私は権限を求めたが、意見が相違したため、実現が妨げられた。資金が不足した場合があったり、資金はあったが充分ではなかった場合があった。他にも、始まりは良かったが、継続できない場合があった。ほとんど意見が一致することはなく、意見の不一致が多かった。総理衙門で経験した困難は、他の人たちには理解できない。

その問題は、文祥をも動揺させたが、文祥とてそれを是正できなかつた。<sup>17)</sup>

李鴻章とロバート・ハートは、二人とも兵器の購買に変化を求めた。李鴻章は、派閥争いに不平を鳴らし、最近の中国沿海部への侵入は「中国史上で最大の変化」であると言ったにもかかわらず、海の力に転向しなかつた。李鴻章は、いかなる攻撃であれ、陸軍がその主力にならねばならないと考えた。海軍が創設されたとき、中国の貿易港から離れた場所で使用されるのが最善であったが（李鴻章はプロシアの戦略マニュアルを引用した）、中国の現海軍は「ほんの少数の船を持つだけ」であり、それほど見栄えのするものでなかつた。それは、重要な〔直隸の〕大沽、北塘、山海関の<sup>シーパワー</sup>一帯や長江河口〔江蘇の呉淞から江陰に至る一帯〕に集中させるべきであった。1874年の時点で、21隻の近代的中国船のうち、李鴻章は、ただ2隻だけが有用であると感じたが、何れも江南製造局<sup>こうなんせいぞうきょく</sup>で製造された船であった。<sup>18)</sup>

1874年末、英国海軍の専門家は、新しいアームストロング製の砲艦（Armstrong gunboat）について議論していた。なぜならそれは、急速な西洋海軍の変化について当時喚起されていた問題、すなわち十分に重装備された装甲により防護することによって、施条式の艦載砲が絶えずパワーを増進させたとしても、海軍の船を保護する工夫を案出できるかどうかという問題に対する答えになるかも知れなかつたからである。新しいアームストロング製の砲艦である「スタンチ（Staunch）」は、装甲されていない船体に1門の大砲を搭載していた。そして、非常に小型であるので、砲艦自身の攻撃の砲火の射程範囲内に入らない限り、上手く命中させることは出来ないとされた。ハートは、中国がスタンチ型の船を購買することを望んだ。そして、上述したように、総理衙門は李鴻章に打診した。1875年4月、李鴻章は、ハートに4隻の砲艦を試験的に購買するとの注文を出した。

その時まで、「スタンチ」は改良されてきた。それで、李鴻章の砲艦のうち2隻は、536ポンドの発射体のために26.5トンの大砲を持つことになり、別の2隻は、800ポンドの砲弾のために38トンの大砲を持つことになった。これらのライフル砲は、砲口が上げられ、水力で動き、各100発を発射でき、海洋を航行するための準備ができていた。これら9ノット〔1ノットは1時間に1海里（約1.852m）を進む速度〕の船の排水量は、2隻は300トンであり、2隻は400トンであった。費用は、11万2,800スターリングを要した。それは、中国の費用で45万両に相当する。この総額のうち13万両は、上海に設置された海関から届けられた。漢口、九江、寧波から、それぞれ4万両が届けられた。広州の海関からも残額が充てられた。<sup>19)</sup>

李鴻章は、巡洋艦（cruiser）が欲しくなったのであろうか。これらアームストロング製の船は、砲艦であった。これこれの重兵器をこれこれの低い船体に搭載して、イギリスから航海してきた。それは印象的な航海であった。李鴻章は、戦略家というより日和見主義者であった。ところが、1875年までに海軍関係の購買を開始し、その次の数年間に、ハートを通じて10隻も購買することになっていた。しかし李鴻章は、いつもハートと付き合っていたわけではなかつたし、中国で唯一の海軍軍需品の購買者でもなかつた。船と兵器の購買は、次頁で示すように、分散化し、混乱していた。

江南製造局は、1875年に26門の大砲を搭載する「馭遠」を建造したが、この船は主力船としては最後の船であった。福州船政局は、衰退を始めた。たとえまとまりのない購買をしなかつたとしても、造船設備を拡大するのは困難であったろう。競争相手は、ライフル銃であった。李鴻章

は、少しは購買の調整者になろうと試みて、競争に加わった。

南洋大臣の李宗義も、アームストロング製の砲艦を4隻注文した。それらは、鉄製というよりはむしろ鋼鉄製の船で、より軽い11インチ砲を搭載していた。李鴻章の最良の船は、「ガンマ (gamma)」という製造者の称号を打ち込んでおり、38トンの船で、21.5インチ砲を搭載していた。この船が、英国人の批評を誘発した。それらの船を購買した際、中国は「我々の最新情報を知り、突如冒険的になって注文を出した」というのである。建造者によって「エプシロン (epsilon)」と名付けられた南京の船については、「イギリス海軍が現在所有する中で最も侮りがたい武器」を所有していると書かれていた。<sup>20)</sup>

李鴻章は、慎重であった。李鴻章が沈葆楨に求めたのは、沈がジゲルに指示を出し、しかる後に福州船政局のためにヨーロッパで鉄甲艦を購買し、ハートが「ガンマ」に付けた値段をチェックすることであった。また李鴻章は、必要になるであろう船の数を沈葆楨に相談した。李鴻章は、新しい年間400万両の海防経費が、既に四成洋税が負担させられていた地方防衛費の勘定の中から取り出されること、その結果「新しい」資金〔年間400万両の海防経費〕のために李鴻章が計画した総てのものが、李の現行の防衛活動（李鴻章にとっては、輪船招商局の資金を調達することも含んでいた）と競合することを恐れた。李鴻章は、海防経費が本当に新しくなることを望んだ。すなわち、これまで四成洋税に含まれていなかった部分から引き出されることを望んだ。<sup>21)</sup> 李鴻章は、防衛の負担を更に北京の方に移行させようとした。

李鴻章は、全く誰も信用しなかった。李鴻章は、李鳳苞（西洋〔英国〕で船の操縦を学習する留学生を監督するため福州船政局より派遣されることになっていた）にジゲル (Giquel) を抑制させることを望んだ。そしてジゲルは、ハートを抑制していた。また李鴻章は、ジゲルが福州船政局のために入手した海軍計画を天津にいるドイツ人の海軍専門家に調査させるよう提議した。ジゲルは、福州で古い機械の使用により「押しつぶされている」と申し立てられたような暗雲の下にいた。しかしながら、李鴻章は、将来福州船政局でより高速の船を建造するのに必要であると呉贊誠（新任の福建船政大臣）を説得し、ジゲルを呼び戻すことができた。李鴻章は、福州の船に関心を持っていた。李鴻章は、「芸新」が不安定であることや、「琛航」や「鎮海」が英国船よりも速度が遅いと陳べたとはいえ、福州が経済力のある工場設備を立案できるかどうか確信を持ってなかった。李鴻章は、まだ自分の艦隊に近代的な船を持っていなかった。すなわち1876年に、彼の新しいアームストロング製の砲艦は、まだ到着していなかったのである。<sup>22)</sup>

1876年、清・英の間にマーガリ事件が発生した際、沿岸の防衛を改善すべきとする官僚の提議があった。<sup>23)</sup> 薛福成のように、海軍力を強化すべきと主張する官僚もいた。マーガリ事件に関する芝罘交渉の際、李鴻章は、米国人のメジャー・マンネック (Major Manneck 或いはマンニックス Mannix) を招き、天津で電気水雷局を指揮させた。その工場は、1876年に李鴻章が天津機器局に付設したものである。<sup>24)</sup> 外国人提督 (admiral) について言うと、李鴻章は鉄甲艦に関心を持つようになり、当時南洋大臣で海軍の問題に関してはジゲルを通じて働いていた沈葆楨に書簡を送り、李が李鳳苞に対し鉄甲艦について極秘に調査するよう頼んだことを記した。李鴻章は、福州の呉贊誠に対しても、金属板を追加することで、福州で計画されている鉄製の混合船を鉄甲船に改造したのち巡洋快速船として使用できるかもしれないと提議した。李鴻章は、福州船政局が、水力装置とオール・メタル構造を備えたアームストロング製の砲艦を模倣できるかどうか逡巡した。

おそらく李鴻章は、福州船政局を他の諸省からの砲艦の要求に対応し、それによって海防費をめぐり困難を軽減することには関心を持ったが、福州船政局から彼自身の海軍に必要なものを供給することに対しては、それほど興味を持たなかった。海防経費は、李鴻章に対し年間200万両を与えることを想定していたが、1877年には、李にその十分の一しか送金されなかった。<sup>25)</sup>

李鴻章は、ドイツの船がイギリスよりも劣っているわけではないことを学習した。そして、李鴻章は、1877年に数名の海外留学生をドイツの製造所に派遣した。しかし李鴻章は、ハートと上手くいっていなかった。同じ年、李鴻章は、ハートを通じて更にアームストロング製の砲艦4隻を注文した。沈葆楨がジゲルを通して2隻のアームストロング製巡洋艦を注文したことを、ハートが耳にしたのと同時であった。<sup>26)</sup>ハートが競争を嫌ったために、柔軟な戦略的思考を有する李鴻章よりも口達者になったのかも知れない。

沈葆楨が、海防経費として毎年発生するであろう400万両の全額を北洋大臣に送金し、北洋海軍が設立された後に、〔南洋分の〕全額が南洋大臣に送られるべきであると主張したのは、大体この頃であった。これは実行されなかったが、李鴻章は、卓越した地位を得ようとし続けた。李鴻章は、福建巡撫丁日昌の後任である何璟が、ハートを通じて船を購入しようとしていたとき、その試みを阻止した。福州船政局自体も、ハートを通じ1隻の鉄甲艦を購入するよう望んだが、李鴻章は、同じように呉賛誠に止めるよう説得した。そのとき、ハートは信用できないとか、中国にはそんなに重たい船を修理するのに十分な深さのドックがないとか、混合船を改造するのが最善であるとか、中国船をそんなに数多く増やしても船長が足りないとか言ったのである。少し後になって、李鴻章は、売りに出された閩江にある外国ドックを福州船政局が購入するよう提議した。しかし、明らかに李鴻章は、ドックは李自身か沈葆楨が購入する鉄甲艦の収容に適しているだろうと想像していた。<sup>27)</sup>李鴻章は、南洋大臣と李自身のために海防経費を守ることを望んだし、ハートとの接触を独り占めすることを望んだ。

他方、李鴻章は、李鳳苞と密接な関係を持っていた。李鳳苞は、1877年にフランス、ドイツ、イタリア、オランダ、オーストリアの中国公使となっていた。李鳳苞は、鉄甲巡洋艦と砲艦——1隻は〔喫水が〕深すぎ、もう1隻は速度が遅い——について報告した。李鴻章は300万両か400万両の費用を要するにもかかわらず、彼自身の修理ドックを建設することを考え始めた。1877年の末に郭嵩燾に宛てた書簡で書いたように、李鴻章は、鉄甲艦クラスの発展が急速であるので、中国は数隻を外国で建造し、それらの船のために国内にドックを建設すべきであると考えた。おそらく修理場が欲しいという李自身の願望は、李のアームストロング製砲艦が、当時、福州船政局の関係者によって配置され、南洋の海で訓練されていたので、このまま永久に福州船政局に配属され続けるのかも知れないと李鴻章が懸念したことで高められた。<sup>28)</sup>

1878年の初めに李鴻章は、中国は鉄甲艦の建造を試みるより、むしろ購買すべきであるとの信念を持っていた。それにもかかわらず、福州船政局の呉賛誠は、2,600馬力の巡洋艦を建造することを決定した。李鳳苞と幾つかの文書の往復をした後、呉賛誠は、福州船政局のオブザーバーをグラスゴーの製造工場に派遣することを決定し、総理衙門に資金を求めた。<sup>29)</sup>その年、飢饉が河南と山西を荒らし、その救済のために資金が必要になった。招商局の財源ですら飢饉の救済のために支出された。沈葆楨は、李鴻章に書簡を送り、飢饉に使用するよりも防衛のために使いたいと陳べた。<sup>30)</sup>福建巡撫何璟が、李鴻章に送金されるべき海防経費の福建割当分を飢饉の救済のため

に使用しようとしたとき、李は何を止めた。その理由は、明らかに李鴻章は、救済資金が閩海関の40%のうち未だ支出先が決められていない部分（uncommitted parts）からもたらされることを好んだからである。李鴻章は、海防経費は、中央政府がその歳入を保護するための策略であるとして書いた。同時に李鴻章は、呉賛誠に対し、福州船政局の将来に関する李鳳苞の助言は、ジゲルの助言よりも優れていること、或いは福州で模造を試みるなら英国モデルが最善であることを仄めかした。<sup>31)</sup> 李鴻章は早い頃から、大型船の建造に向けた船政局の計画に落胆させられていたのであるが、こうした落胆とは裏腹に、代理人として李鳳苞の起用を進めていた。次のように言えるかも知れない。船政局により多額の費用の掛かる船を建造するよう促す場合、その船は福建の財源から資金を得るのであろうが、李鴻章は、財源の支出に関しては、北京の言い分に対する省側の言い分に加勢していた。その時、李鴻章は、福州で建造された船を彼自身が使用するために保有することを意図していなかった。<sup>32)</sup>

彼がどのような計画を持っていたにせよ、呉賛誠は、福州船政局で建造された三番目の木鉄船（composite）の「康済」を商用に改造させなければならなかった。呉賛誠は、〔経費の窮迫を理由に〕改造しないことを望んだ。<sup>33)</sup> 李鴻章はどうかといえば、李の海軍購買計画は、1878年に飢饉により脅威を与えられただけでなく、宮廷が新たに円明園の再建に関心を持つようになったことで脅威にさらされた。紛れもなく李鴻章は、1878年に江蘇巡撫〔吳元炳〕が、河川保全事業のために、南洋大臣の海防経費に指定された資金の一部を使用したことにも注意していた。<sup>34)</sup> 沈葆楨は、福建を引き続き自らの海防上の利益に貢献させるため、福州船政局の維持について論じ始めただけではあったとしても、沈は福州の諸船を獲得することに興味を示した。海防経費ほど無防備なものではなかったと思われる。

1879年に日本が琉球を奪取すると、李鴻章は、鉄甲艦を購入することと彼自身のドックを建設することにより一層の興味を持つようになった。しかし、資金と訓練を受けた人員は供給不足であった。彼は外債を検討したが、その考えを捨てた。<sup>36)</sup> 李鴻章はやる気を無くしたにもかかわらず、沈葆楨はハートを通じ船を購入することを望んだ。ハートは依然として中国に砲艦を勧めていたので、李鴻章はハートを信頼してよいのか疑問を持ち、沈葆楨の申し出に逆らった。李鴻章は暗に、沈葆楨が呉賛誠の退いた福州船政局に再び興味を抱くようになったとすら言った。李鴻章は購買代理人の李鳳苞に対し書簡を送り、自分と沈は、戦略の上でも、提案された海軍の管轄者の候補としても、ハートに反対すると記した。李鴻章は、鉄甲艦についても沈葆楨に尋ね、（以前たった2隻では使い物にならないと議論して沈の購買計画を思い止まらせたにもかかわらず）1隻であっても実行すると陳べている。ハートは、売り手であるべきではなかった。鉄甲艦について調査する中で、李鴻章は英国公使の曾紀沢にも助言を求めた。そして、衝角艦（ram-equipped ship）への関心を詳細に記すため、現行の海軍の発展を十分に認識していた。李鴻章は、彼自身の経路を通じて購買することを望んだ。そして、ハートと総理衙門の双方との関わりを断つことを望んだ。総理衙門は、砲艦についてのハートの考えを明らかに受け容れていたからである。沈葆楨との関係について、李鴻章は柔軟であった。李鴻章は、1879年には日本と戦闘するという沈の願望に同意しなかったし、船の購買に関しては、明らかに南洋大臣を競争相手と見なした。<sup>37)</sup>

1879年に李鴻章が行った巧妙な取引は、この競合の現れである。1875年に南洋大臣が注文した、改良型の砲艦「エプシロン」4隻が到着した。ハート（李鴻章にとって依然として利用価値があっ



た)を通じて、李鴻章は、砲艦が天津に引き渡されるよう手筈を整えた。李鴻章は、天津に4隻の砲艦を保有することを望んだ。結局、李鴻章が沈葆楨に対し主張したのは、静かな長江に対する沈葆楨の責任については、それほど過酷な要求はなされないが、李鴻章の責任は、浪の激しい北洋の海を包含しているというものであった。従って、李鴻章の新奇な「ガンマ」は、でこぼこがあり、フジツボが付着していて、江南製造局で修理する必要があったが、沈葆楨には適していた。おまけに、李鴻章は、資金不足と総理衙門の反対を引き合いに出して、沈葆楨が鉄甲艦を購入するのを止めるよう再び説得したにもかかわらず、2隻の衝角巡洋艦を新規で注文できるかどうかをハートに尋ねたと陳べた。李鴻章は、ロンドンにいる曾紀沢に対し、ハートの最新報告について検討するよう求めていたにもかかわらず、李鴻章がその購買を行う間、ハートは利用されたように思われる。<sup>38)</sup>

日本の琉球処分について言えば、唯一の具体的行動は、福州船政局により行われた。それは、船の砲兵隊員の数を増やしたことであった。<sup>39)</sup>1879年末に沈葆楨が死去した結果、李鴻章は、「自強運動」の数多くの苦難と複雑さから解放された。十年間の折り返し時点で、李鴻章は、恐らく海軍の発展のための最も重要な代弁者<sup>スポークスマン</sup>となった。

李鴻章による巡洋艦の注文には、アームストロング製の非装甲砲艦ほど大きなものは含まれていなかったし、より高速のものも含まれていなかった。しかし、鋼製の衝角巡洋艦は、4門の新型速射砲だけでなく、前方と船尾に2門の10インチ・アームストロング砲が搭載されており、それぞれに円形の水雷のついた二つの補助的な蒸気カッターがついていた。<sup>40)</sup>より旧式の砲艦について言えば、李鴻章は、他省もそれらを購買するかも知れないと考えた。1880年、既に李鴻章は、ロシアがイリにおける要求を援護するために朝鮮の諸港を占領するかも知れないと心配していた。その1880年に、ハートは、日本がちょうど14隻の砲艦を購買したという縁起の悪い報告を行った。<sup>41)</sup>その結果李鴻章は、李がハートを通じて注文したいと思っていた砲艦を諸省が必要としているのか調査した。李鴻章は、そうした砲艦を購買するために諸省から供給される資金が、海防経費として割り当てられた4割の中からもたらされるべきではないことを銘記した。海防経費は、李鴻章が引き続き受け取るべきものであったのだ。李鴻章は、福建と同様に、山東が2隻の砲艦を欲しがっており、浙江が1隻を探していることを知った。広東は、李鴻章を通じて働きかけることを提案しなかった。結局、李鴻章は、ハートを通じ山東のためにたった2隻の砲艦を注文しただけであった。広東巡撫は1隻を購買したが、李鴻章を通じてではなかった。<sup>42)</sup>ハートは、これらの事に失望した。以後、ハートは、もはや船の斡旋人<sup>ブローカー</sup>として李鴻章に仕えなくなった。

李鴻章は、他の諸省のために船を購買しようと試みるのを止めなかった。1880年の春に、彼は李鳳苞に書簡を送り、英国船2隻を探していること、1隻は福建省のために探しており、福建省が直截送金するが、他の1隻は李自身のためか、或いは当時南洋大臣の丁日昌のために探していると陳べた。ハートは、締め出されるべきであった。そして、李鴻章は、中国人がこの種の問題を処理するのは不可能であるとする沈葆楨の警告に対し、李鳳苞は反論すべきであると陳べた。李鴻章はもう一つの事柄を有したが、それは福州船政局が訓練された人員の供給に関して李に協力しないであろうということであった。<sup>43)</sup>

福建省政府は、福州船政局における新規の生産のために設定された資金を使い、新しい船の支払いを行うことを計画した。このことは、古い福建の建物の内で競合していた証拠であるだけで

なく、中国で実行されていたように、購買と建造を同時に行うのは、水と油のように混ぜ合わせられないという誤左であった。李鴻章は、南洋大臣に配分された海防経費の一部を使い、二番目の船の支払いを行うことを計画した。<sup>44)</sup> 李鴻章は、福建船政大臣の黎兆棠に書簡を出した時、それらの船〔「柏爾来」と「奧利恩」の2隻〕について陳べたのであるが、吉林のスガリー〔松花江のロシア語名〕に海軍の造船所を創設し、そのために福州船政局で訓練された管理員が必要であったにもかかわらず、直近の注文の財源について言及しなかつた。<sup>45)</sup> 李鴻章が福州船政局における造船の改善を奨励したのは、上辺だけであったようである。

最新の艦船購買事業は、中国がロシアとの間で面倒なことが起こった際に、英国海軍本部が出来上がった海軍設備を中国に売ることに異議を唱えたとき崩壊した。李鳳苞は、もちろん完成するまで時間がかかるが、もし新式軍艦の建造を発注するなら、困難は乗り越えられるであろうと考えた。新式の建造について宮廷の是認を取り付けていた李鴻章は、クルップ製後装砲が最善であり、中国の兵器工場は必要な弾薬を製造することができると陳べた。それゆえに李鴻章は、李鳳苞にドイツ製の水雷艇について問い合わせることを求めた。イギリスへの注文は、撤回された。とにかく李鴻章は、もはや福建のために購買しようとしなかつた。<sup>46)</sup>

李鴻章の戦略的思考は、決して明確ではなかつたが、変化しているように思われた。1880年9月に、李鴻章は一人の友人に書簡を送り、大連湾と旅順港から作戦を行うために、4隻の鉄甲艦と10余隻の快速船・水雷艇が欲しいと記した。しかし、李鴻章は、中国を防衛する上で、海軍を最も重要な要素とは見なしていなかつた。当時、李鳳苞は、ドイツ市場を好ましく思うようになっていた。李鴻章は、李鳳苞に対し、必要とする様式の船が英・仏の造船工場に発注されているかどうか、また注文の品が新式であるかどうかを参酌し、外交上の反動については曾紀沢の揺惑の言を信用しないよう求めた。<sup>47)</sup> しかし李鴻章も、ドイツの工場に好感を持ち始めていた。その理由は、おそらく外交的に行き詰まったからであり、そしておそらく曾紀沢と疎遠になったからであった。ハートは、李鴻章がドイツに好意を示しているのは、デトリングが李に悪影響を与えているからだと主張した。

李鴻章は、多方面に目を向けなければならなかつた。1880年に船を琉球に派遣し、年貢の支払いを強制することを望む官僚も中には居たが、李鴻章はそうではなかつた。<sup>48)</sup> 張之洞が李鴻章に向けた反対の声を次第に大きくするようになっていた。張之洞は当時、翰林院で侍講の地位にあり、宮廷で主戦派と気脈を通じていた。左宗棠がロシアに対抗する西征のために年間600万両か700万両を得ていたのに、李鴻章は、当てにしていた海防経費の受け取りが滞っていた〔訳註：海防経費は南北合わせて年額400万両であったが、実際に集まったのは100万両に及ばず、北洋には僅かに30～40万両が送られただけであったという〕。李鴻章は、強力な海軍の必要性を力説する左宗棠を苦々しく感じた。李鴻章は、左宗棠は偽善者であると陳べた。<sup>48)</sup>

ドイツの造船所は、李鴻章の関心をこれまで以上に引き付けるようになった。そして李鴻章は、ジゲルを利用することについて曾紀沢と議論した。李鴻章は、福州船政局の人員を欲しがった。1881年の初めに李鴻章は、曾紀沢を通じて、まだなお英国船について問い合わせを行い、時には曾の公使館のスタッフがトラブルを起こしたというようなデマを飛ばした。それにもかかわらず、李鴻章は、李鳳苞を経由してドイツの造船所に注文を出した。曾紀沢は、「ドイツへの転換」に気分を害した。何故なら、曾のロンドン派遣の役割が損なわれたからである。<sup>49)</sup>

李鴻章がドイツに注文したのは、南北を統合した形で中国沿岸を防衛するために、7,500トンの軍艦を得るためである。李鴻章は、それを最終的に3隻必要とした。李鴻章は、福州船政局に居る黎兆棠に書簡を送り、国内でそうした大型船を建造する可能性について陳べたが、確信は持てなかった。李鴻章は、彼のドイツ製軍艦の建造を観察するため、数名の福州船政局の人員を望んだ。そして、李が建議した吉林造船所のために他の人員も欲しがった。李鴻章は、福州船政局で計画されていた「快船」が上手く生産されることを望んだ。しかし、李鴻章が本当に福州船政局に期待していたのは、軍需品、携帯兵器、支援装備の分野であったように思われる。李鴻章は、福州で建造された船を使えばロシアの脅威に対抗できるとする左宗棠の考えに対し、人を馬鹿にしたような言及を行い、急いで外国船を購入していたので、おそらく黎兆棠は、李鴻章が福州船政局について心に描いた将来に不安を感じたであろう<sup>50)</sup>。

北洋大臣〔李鴻章〕は、福州船政局のために未来を設計していた。李鴻章は、1881年の春に「威遠」と「済安」の使用について議論した。2隻の船は、福州船政局でそれぞれ1877年と1873年に建造されたものであった。李鴻章は、彼のドイツ製軍艦（その時までには2隻を注文していた）に支払うよう取り決めていた。李鴻章は、後になり心配になった。なぜなら、南洋大臣から福州船政局に送られるはずの補助金が支払われていなかったからである。しかしそれは、当時、南洋大臣が左宗棠であったから発生したことであった。李鴻章の関心は、全てがその造船所への偏愛から発せられたわけではない<sup>51)</sup>。近代的な船を建造するための資金を蓄える目的で、伝統的な水軍を解散するようしばしば要求していたにもかかわらず、彼の准軍水師を旅順港に保持していた。旅順港は、1881年に李鴻章が海軍基地の建設を開始した場所であり、ここの駐留軍では夥しい腐敗がはびこっていた<sup>52)</sup>。李鴻章が福州船政局のためにいかなる計画を立てたとしても、黎兆棠が福州船政局で新式快速船を造り始めると報告したとき、船政局の場所を使って、旧式の「万年清」を商船に切り替えるのに当てていると報告していた<sup>53)</sup>。

1882年、ハートは、李鴻章と一緒に彼の昔からの取次先<sup>エージェント</sup>を再び利用しようと試みた。そして、李鴻章の発注したドイツ製軍艦に幾らか似ており、その時建造中の新型アームストロング船に関する明細書を李に送った。李鴻章は、これらの明細書を李鳳苞に渡した。しかし、ハートとを結ぶ線路は開けておくと同時に、ドイツとの取引を継続することを決めた。イギリスとドイツとの競合が発生することで、中国は利益を得られるからである。これまでずっと非難されてきたように、李鴻章は、注文品が間違いなく完成することを随分当てにしていると李鳳苞を注意した<sup>54)</sup>。李鴻章にとってもう一つの問題は、黎兆棠が新しい建造物を管理するため、福州で福州船政局の卒業生を保持することを望んだことである。李鴻章は、彼らがドイツで新造軍艦の出来上がったものを観察し、そして、おそらく将来は李鴻章のために働く準備をすることを望んだのである。ここに存在するのは、購買と建造の両事業間でぶつかり合いが発生したもう一つの例である。黎兆棠は、不眠症を理由に船政大臣の辞任を申し出た<sup>55)</sup>。

1882年に張佩綸が日本は朝鮮に対し干涉したのだから中国は日本を攻撃すべきであると主張した時、李鴻章は、中国にその準備はできていないとして回避した。南北洋大臣に対しそれぞれ年間200万両の海防経費を送付する計画は迷走し、福建を含めた諸省は、割り当てられた〔負担〕額を滞納していた。実際、国内建造事業は、苦境に立たされていた。左宗棠ですら、福州船政局で満足できるような砲艦の注文を取り付けることができなかった。李鴻章自身は、1万人の規模

で淮軍を削減するよう命じられた。その命令は、疑いもなく、経済における場合と同様に、李鴻章の権力を抑制することを狙っていた<sup>56)</sup>。

1882年の末頃、李鴻章は、快速船に関する助言を求めてハートに接近した。そしてその時、李が受け取った青写真はひっくり返され、李鳳苞に対し英・独の造船所において検討されることになった。李鴻章は、〔イギリスから購入する〕これらの衝角艦が鉄甲艦〔ドイツ製の「定遠」<sup>ていえん</sup>と「鎮遠」<sup>ちんえん</sup>〕と一緒に使用できるのかを知りたがった。そのことは、戦術上の知識が次第に洗練の度を増していることを示唆していた。李鴻章は、福州船政局に居る黎兆棠に対しても、ハートが唱えるような、5,000馬力で17ノットの船を建造できるのかどうか尋ねた。加えて、李鴻章は、輸送のために必要であるとして、「永保」<sup>えいほう</sup>と「琛航」<sup>ちんこう</sup>を請求した。そして李鴻章は、黎兆棠に対し、艦隊を西貢<sup>サイゴン</sup>、インド<sup>インド</sup>、日本、朝鮮に派遣してお披露目を行い、勢威を遠方に及ぼすべきであると陳べた。黎兆棠は、やはり思い止まるよう求めた<sup>57)</sup>。

左宗棠ですら、ドイツは中国で建造するより早く且つより安価に大型船を提供できると助言していた時、2隻のドイツ製巡洋艦を注文した。左宗棠は、福州にある旧工場からいまだに船を購入していた。そして、その工場の歴史上初めて建造費の半額を支払ったが、左宗棠は、福州の生産工場は劣化していると不満を陳べた。黎兆棠は、2,400馬力の一番船「開濟」<sup>かいさい</sup>が、左宗棠に明け渡されると北京に報告し、左宗棠（まだなお南洋大臣であった）は、これらの艦船のうち5隻を、北洋大臣は2隻を欲しがっていると付け加えた。黎兆棠は、工場設備の拡大を求めたが、その直後の1883年5月23日に、張夢元<sup>ちようむげん</sup>が黎に替わり福建船政大臣を引き継ぐように命じられた<sup>58)</sup>。

これらの数年間、フランスとの緊張が高まっていた。張夢元が船政局を引き継いだとき、彼は造船のための援助の必要性を力説した。というのも、中国は外国人を頼みにできなかったからである。福州船政局は、時代遅れになっていた。1880年代初めに、船政局は、その船は不安定で時代遅れであると告発する保守派の攻撃に晒された。李鴻章は、1872年の時ほどには、造船所の防衛に積極的ではなかった。李鴻章は長らく彼自身の道を歩んできたのであったが、船政大臣は、李鴻章に人員を供給するのに充分には協力的でなかった<sup>59)</sup>。

他の官僚も船を購入するのを好んだことが示されたとはいえ、このように購買と建造の何れを選択するかを判断することを通じて、李鴻章の役割は強化された。陸海軍に向けた武器・弾薬も、外国市場で購買された。1871年の初め頃、曾国藩は、省官僚たちが、転売して利益を上げる目的のために野放図な購買を行うことに関心を持った<sup>60)</sup>。資金の調整や戦略的思考は存在しなかった。もし李鴻章が全ての兵器の購買を中央集権化することに成功していたなら、好事であったろう。一人の強力な指導者が存在したなら、陸上及び海上で、軍需品の標準化を成し遂げていたであろう。しかし、清仏戦争前夜の艦隊は、標準化からはほど遠かった。

1882年にシューフェルトは、中国の近代的艦隊は四つの「別」部隊であると説明した。李鴻章は、およそ1ダースの近代的艦船を持っており、シューフェルトの表現で言うと、非常に重い重砲を備えた「個性的な」砲艦が含まれていた。口径の大きい砲、機関銃、電灯等を列挙すると同時に、シューフェルトは、まだ「知性の備わった人員と徹底した組織化」が欠如していると陳べた。シューフェルトは、李鴻章の寄せ集めた艦船が戦術的・戦略的に完成されているのかについても疑問を感じていたかも知れない。砲艦の速度は、9ノットと見積もられ、巡洋艦の速度は、16ノットと見積もられ、福州の艦船の速度は、おそらく10ノットと見積もられた。たとえこれら

の速度が、手荒に使用したり整備に無関心なことで、低い平凡な数字にまで引き下げられていたにしても、寄せ集めの艦隊が、港湾の防衛を除いた共通の使命を持って一つの艦隊として使用され続けるというのは、あり得ないように思われる。李鴻章は、1882年にその問題に気付いた。この年に李鴻章は、李鳳苞に対し、独・英のどちらからであっても明らかに同じ型の船を購入しないように警告した。しかし李鴻章は、たった一度だけ警告したに過ぎなかった。<sup>61)</sup>

他の近代的艦隊は、もはや標準化しなかった。1883年に、一部分が水雷艇から成る広東艦隊は、安南〔ベトナム〕の海でフランスを偵察するよう宮廷から命じられた。しかし、当時の両広総督曾國荃は、彼の船が「上等でない」ことや修理する必要があることを理由に拒絶した。その年、広西巡撫徐廷旭は、福州船政局に対し、南洋を防御するために10隻の巨大蒸気船を派遣することを求めた。そして、広東の船はただ包圍作戦にのみ使い物になり、劉銘伝の船は「小型で弱体である」と陳べた。徐廷旭自身の防衛計画は、火舟（fire raft）を含んでいた。そのことによって、現代の読み手は、古き水軍が解散されていなかったことに気付かされるのであった。<sup>62)</sup>

艦船・要塞用の軍備には、口径や型ですら標準化されていなかった。1875年に李鴻章は、沈葆楨にクルップ（Krupp）重量砲とスナイダー製及びレミントン製携帯兵器（Snider and Remington hand arm）を標準使用する必要性を力説し、福州船政局は余りに多くの異なった型式の兵器を搭載しすぎると付け加えた。しかし1879年に、李鴻章自身の管轄区域において英国人観察者は、「少し前に、筆者は、二、三時間かけて大沽港から天津まで旅行したが、その途中でレミントン製後装銃を携帯した守備兵、火縄銃を持つ男、射手、滑腔銃を運ぶ川舟、クルップ製後装砲を搭載した小綺麗な砲艦を見た」と記した。<sup>63)</sup>

それにもかかわらず、福州船政局が建造した砲艦に関する李鴻章の見方は、ずっと正しかった。1884年の馬江の役で悲劇的な最期を迎えた時、「揚武」は13門の英国製前装砲を搭載していた。「伏波」は5門のフランス製ヴァヴァソール（Vavasseurs）を搭載していた。「飛雲」は5門のプロシア製後装砲を搭載し、商船の「永保」（途中でフランスに破壊されたのであるが、明らかに急遽改造中であった）は、8インチ・10トンのクルップ砲を3門搭載していた。1876年に英国海軍のシヨアー（Shore）監察官は、福州船政局でこれら旧式の滑腔砲と共にホワイトウォース（Whitworth）製、クルップ製、ブレイクリー（Blakely）製兵器に使用する砲弾や薬莖が捨てられている廃棄場を見た。馬江の要塞に関する張佩綸の報告書は、左宗棠の「劈山砲」を含む、多くの大砲の型について言及していた。「劈山砲」は、左宗棠が太平天国の乱の際に考案した「山砲」である。<sup>64)</sup>

弾薬の品質は、良くなかった。馬江の役が終わった後になって、炸裂しなかった「揚武」の砲弾の一部は、〔火薬ではなく〕石炭か木炭で満たされていることが分かった。外国からの供給は、保証されていなかった。このころ曾紀沢は、中国の購買した弾薬が、それを使用するつもりの大砲に適合していないこと、それに火薬が旧すぎることを警告した。<sup>65)</sup>

購買と製造を並行する状況（buy-and-build situation）が混乱に陥る中、計画は存在せず、問題に関する十分な理解はなかった。様々な程度で、幾つかの外敵に対する敵意のみが存在した。多量のカネが費やされたが、ほとんど効果は無かった。装備が多様なことは、沿岸の政治的な区切りを反映したものであり、協調的な行動と壮大な戦略を欠くことになる一因となった。李鴻章は、ただ船と兵器をずる賢く便宜主義的に購買することで、混乱に拍車を加えただけであった。

李鴻章が次第に海軍の軍需品を購買する方を好むようになったのは、ただ単に時間に迫られて

いたとか、外国製品が卓越していたとして説明されるわけではなかろう。それは、部分的には個人の影響力の問題でもあった。幾つかの兵器製造工場施設は、高官により設立されたために、創設者の<sup>キャリア</sup>経歴に依存しすぎていた。天津、上海、南京、福州の工場は、暗黙のうちに個人名と結び付けられていた。李鴻章のような一人の男は、左宗棠の造船所に影響力を持つことができたが、政治ゲームの賢明な競技者であったにもかかわらず、それに「勝利」しなかった、福州船政局は「彼のもの」ではないままであった。李鴻章の北洋在任期間が長くなるにつれ、大部分の工場が存在する南洋での影響力を失った。沿岸を再編成し購買の集中を図ろうとする李鴻章の策略は、幾分かはこうした状況に対する李鴻章の対応であった。李鴻章は、可能な限り独立性を得ようとし、彼「自身の」北洋艦隊とともにそれを開始した。個人的要素は、中国で生産された兵器の品質に影響を及ぼし、「購買・製造」問題を複雑にした。

李鴻章の軍事工場を創設する際に手助けをしたホリデイ・マカートニー（Halliday Macartney）は、1876年に中国には造船所と兵器工場が四つあると記した。すなわち、直隸総督の下に天津機器局、道台と江蘇巡撫の下に上海機器局〔江南製造局のこと〕、「直隸総督のみ認知する」金陵機器局（江蘇の資金に頼っていたとはいえ）、宮廷大臣の下に置かれた福州船政局であった。<sup>66)</sup>

李鴻章は、天津機器局の生産品をきちんと保護した。それは、北京の練軍、満洲北部緑営軍、そしてもちろん李鴻章の淮軍にも供給された。清仏戦争期、李鴻章は江南地域の軍隊に彼の魚雷と水雷を供給する責務を感じなかった。<sup>67)</sup>

直隸に遷って以後も、李鴻章は、南京〔金陵機器局〕に長らく影響力を持ち続けた。沈葆楨と左宗棠の二人は、南京における〔両江総督としての〕任期中に、彼ら自身が必要とする弾薬を供給するため他の工場施設を建設しなければならなかった。しかし南京における李鴻章の影響力は、限られていた。李鴻章が離任して以後、後任の道台による策動があった。彼らは工場の管理人であるマカートニーに反抗した。彼らは工場を怠惰な「親方（foreman）」で満たし、盗みを見て見ぬふりをし、マカートニーのことを李鴻章に密告するなどした。マカートニーについて、李鴻章は、1分間に260発を発射できるガトリング砲の失敗に一旦失望した。その大砲は、南京で製造し、天津において李の眼前で試験を行ったのである。何度も激高した結果、マカートニーは辞任を申し出た。李鴻章は、結局1875年に彼を解任した。金陵機器局は、急速な技術的發展を果たした時に適材を失った。マカートニーが去った主な理由は、李鴻章が依然として南京の「ボス」であったにもかかわらず、遠方からマカートニーを守ることができなかったからである。<sup>68)</sup>

李鴻章は、1896年まで江南製造局の管理人であった。とはいえ、李の製造局への影響力は、特に1880年代初めに左宗棠が〔両江総督として〕南京に在職して以後、衰退した。李鴻章は、江南製造局の生産品或いは武器・弾薬の配給に際立った<sup>きわだ</sup>支配力を発揮しなかった。江南製造局の記録の中には、1868年から1904年までの武器引き渡しに関して、95頁に及ぶ図表が含まれている。そして、この図表の中で、北洋大臣は、およそ12の機関からの受託者として現れるが、南洋大臣は、それ以上の機会、主に幾つかの旧式水軍〔水師〕を含めた江西・江蘇の部隊を通した受取人として現れる。しかも、李鴻章は、福州艦隊が中国で建造した船を手に入れた以上に、江南製造局の生産品を自分のものにする傾向があった。その時期に江南製造局から供給された25隻の近代的艦船のうち、ほとんど全てが両江総督の艦隊に属していた。ただ1隻〔<sup>きょえん</sup>「馭遠」〕のみが、1884年8月における<sup>ぼこう</sup>馬江の<sup>えき</sup>役に参戦した。<sup>69)</sup>

李鴻章と福州船政局の関わりは、最も興味深いものがある。福州船政局は、李鴻章の競争相手〔左宗棠〕が創設し、天津から物理的に最も離れていた。李鴻章は、船政局人員にまで扱げられた通信関係を維持しており、疑うまでもなくかなりの影響力を持っていた。例えば、李鴻章は、沈葆楨以後の船政大臣の人選に関与した。李鴻章の書簡の中では、郭嵩燾<sup>かくすうとう</sup>、丁日昌<sup>ていにっしょう</sup>、吳贊誠、黎兆棠、張夢元の名前が、候補者として挙げられていた。張夢元が任命された結果、左宗棠が（两江総督として）短い時間であるが再び長官の人選に参入したとはいえ、郭嵩燾を除き、全員が船政大臣になった。張夢元は、ときたま自分の報告書に左宗棠の署名を使用した<sup>70</sup>が、こうした誤った行いは、1875年の丁日昌の任期にまで遡る。張佩綸も、1880年代に福建船政大臣であったが、沈着冷静な李鴻章の書簡により免職させられた〔1885年1月27日〕。李鴻章の利害関係は、『籌辦夷務始末』や『船政奏議彙編』のような公刊された編纂史料集の中に現れないことに注目すべきである。李鴻章は、非公式に動いた。李鴻章は、ときおり船政大臣と離れ離れになっているように感じた。何故なら李鴻章は、船政局の目標を達成するために間接的に働きかけたからである。例えば、南京にいる時は、沈葆楨に手紙を書き、或いは海外の李鳳苞にすら手紙を書いて働きかけた<sup>70</sup>。

李鴻章は普通、能力主義により長官の候補者を提示したが、李の考えでは、能力には、技術的側面だけでなく、政治的側面もあった。そのことを示す一つの証拠がある。すなわち、吳贊誠が福建巡撫に任命された時、李鴻章は、船政大臣の後任について意見を聴かれた。李鴻章は黎兆棠の名を挙げたが、黎は吳贊誠と共に李鴻章派に属する天津の同僚であった。事実、李鴻章が吳贊誠を大臣に推薦したとき、黎兆棠をもう一つの選択肢として提示していた。しかし1878年、吳贊誠の辞職問題が発生した時、李鴻章は、天津海関道を務めていた黎兆棠が、汽船に関する知識を十分に有し、吳の後任が務まるのか確信を持てなかった。李鴻章は、吳贊誠が大臣に留まることを望んだ。そして吳を励まして、閩浙総督何璟に書簡を送り、船政局への支払いを促すよう要求させようと試みた。しかし吳贊誠は、まだなお首を縦に振らず、自分の後任には吳仲翔<sup>ちゅうせう</sup>か夏猷綸<sup>かけん</sup>が良いと推薦した。二人とも造船所の工場の監督者として長期にわたる経験を持っていた。吳の辞職問題は、だらだらと長引いた。そして1879年9月、李鴻章は、何璟に対し、張夢元が引き継ぐと陳べた。李鴻章は、南京の沈葆楨にも、造船所を指揮することにもう一度関心を持ってはどうかと提案した。しかし李鴻章は、吳贊誠自身が推薦した専門家〔吳仲翔と夏猷綸〕を支持しなかった。そして、1879年10月に吳の辞任がようやく受け容れられた時<sup>71</sup>、李鴻章は、その能力がどうであれ、その地位を黎兆棠に渡す時期について異議を唱えなかった。

その後しばらくの間、李鴻章の福州船政局との交信は、間接的であった。交信する相手の一人は、何璟であった。そして、これまで見たように、何璟と李鴻章は、福建省のために1隻の船を購買しようとする企てに関わった。1880年5月、李鴻章は、李鳳苞に送った書簡の中で、吳仲翔（監督のアシスタントとして造船所に長らく残っていた）が、福州で訓練を受けた者を使用するという李鴻章の計画に協力しようとしないと陳べている。李鴻章は、その男を嫌悪した。その年の終わりに、船政局が保守主義者から攻撃された時、一つの上諭が下され、不正行為と公金横領の廉で吳仲翔をはっきりと非難した。李鴻章、陳蘭彬らは、吳を批判し、弁解を聴いた。この場合においては、黎兆棠大臣は、彼が称賛する吳仲翔を特別の会見のために戸部に赴かせる必要性を力説した。このとき黎兆棠は、道台に任命される可能性があると予想していた<sup>72</sup>。

その決定は、妥協であったように思われる。決定の中で、厄介者は「二階へ蹴り上げられた。」間もなく李鴻章が、天津で彼自身の海軍を創設するに当たり、呉仲翔を招いたという事実には、より一層興味深いものがある。結局李鴻章は、李から独立した立場にある者を嫌ったほどには、その男を嫌ってはいなかったのである。もし李鴻章が呉仲翔を直接雇用したのであれば、呉の能力は有用なであろう。福州の造船所における呉の位置は、李鴻章の推薦を受けた呂庭芷により補充されていた。呂の能力について、李鴻章は、1880年直隷に来たこと、李鴻章が彼に対し適当な仕事を与えられなかったこと、そして左宗棠が一度彼を欲しがったことを陳べただけだった。もし誰かがこれらの計略から利益を得たとすれば、李鴻章であった。<sup>73)</sup>

李鴻章が福州船政局から欲しがったものは、訓練された人材であったことは、明白である。李鴻章は、めったに船の使用について関心を持たなかった。李鴻章が1875年から1883年までの間に書いた全ての書簡中、福州船政局が建造した船の使用に言及したのは、僅か半ダースしかない。ときおり李鴻章は、造船所に対し生産の向上を促した。李鴻章の書簡のうち約14通が、この種のものであるが、この14通の約三分の一は、大砲と水雷等について論じ、残りは国内で建造された船についての強い関心を表したというよりは、むしろお座なりの提案であったように思われる。<sup>74)</sup>

最初、李鴻章は、自分の購買した船や工場施設に向けて、訓練された人材が福州から流入することを求めた。1875年から1883年に至るまで、約60の書簡が、李の必要とした人材や、福州の卒業生を李鴻章の購買した船の中か、或いは李鴻章の船が製造された海外の工廠に配置することについて扱っている。福州は、そうした訓練された人材の最上の供給源であった。江南製造局では艦上訓練（shipboard training）があったが、明らかに李鴻章は、福州における徹底した水陸両用訓練（ship-and-shore training）の方を選んだ。<sup>75)</sup>

これら60件の書簡の半数以上を見ると、李鴻章の関心が艦長や将校にあることが分かる。1875年から1883年に至る7年以上の間に、書簡集〔『朋僚函稿』〕の中には約16名の将校の名前が現れる。そして、そのうち半数以上の9名が、日清戦争（1894～1895）の際、黄海の戦いで李の北洋海軍の中で戦った。福州で訓練を受けた人材のうち、李鴻章に使われることになった劉步蟾と邱宝仁の場合、李は以前、2人の個人的な特徴についていくつかの但し書きをしていたのであるが、訓練された将校はほとんど居なかった。そして、李鴻章の関心は、鋭敏であった。<sup>76)</sup> 福州船政学堂の卒業生は、もちろん福州艦隊に務める者もいたが、フランスとの馬江の役（1884）に参加した9名の将軍のうち、たった4名だけが福州の卒業生であったので、李鴻章は勝ちを取めたように思われる。

同一人物が福州それ自体の造船事業を監督する必要があったが、李鴻章は、ドイツ製戦艦の建造を監視する目的でも福州船政前学堂〔製造学堂ともいう〕の卒業生を欲しがった。そうした3人の学生は、魏瀚、陳兆翱、鄭清濂であった。彼らは、1880年代末にヨーロッパでの先進的な学習を終えて福州に戻っていた。李鴻章自身は、ある復帰した福州の卒業生を推薦する意見書の中で、彼らを傑出した人物と称していた。前の二人は以前、鄭清濂に対し、福州の建造計画に持てる期待は小さいと不平を述べたことがあった。或いは、李鴻章は、李鳳苞からそう聞いた。李鴻章は、この3人がドイツに行くことを望んだが、監督の黎兆棠が協力するかどうか確信が持てなかった（李鴻章は彼に対し、帰国した学生の中に野心を持ちすぎたり悪習に染まった者が居ると叱りつけた）。しかし、1883年に黎兆棠が完成した「開濟」の進水を報告したとき、李鴻章は、楊廉臣<sup>77)</sup>



李寿田<sup>りじゅでん</sup>、呉徳章<sup>こたくしやう</sup>に謝辞を贈った。3人は魏、陳、鄭と同じ訓練を受けたが、ヨーロッパから帰国した時、李鴻章からそれほど高く評価されてはいなかった。李鴻章は、最上の人材を得た。鄭清濂の福州復帰と魏瀚の復帰計画は、1883年11月に左宗棠の署名の付いた張夢元大臣の意見書の中で始めて知らされた。<sup>78)</sup>

李鴻章は、1881年に創設した海軍学堂のための人材も、福州船政局から探し求めた。その年、李鴻章は、海外に派遣して進んだ訓練を受けさせるため、4人の名前を福州船政局の名簿から移した。李鴻章は、彼らを指導者として自分の学堂に招き入れた。1882年に呉大澂<sup>こたいちやう</sup>が李鴻章のために吉林機器局<sup>きつりんきききよく</sup>を創設した時、それが兵器工場であるにもかかわらず、李鴻章は建議された吉林の造船所の為の人材をも欲しがった。李鴻章は正しく1881年大沽に小規模の海軍工廠を設けたが、その工廠は小型船を製造し、水雷の基地を含んでいた。<sup>79)</sup>

このように李鴻章は、福州船政局に従属する役割を想定していた。しかし、福州船政局が保守派に攻撃された時、李鴻章は福州の訓練教程を擁護できた。<sup>80)</sup> 李鴻章は、福州船政局を必要としていた。しかし、それとは逆に、福州船政局の方が人材を必要としたとき、船政局を手助けするつもりは概してなかった。例えば、李鴻章は、自分は呉賛誠が現場総監督として欲しがった1人を天津機器局から手放しはしなかったと陳べた。1880年黎兆棠が厳しく批判された時に造船所の経営を改善しようと試みて、左宗棠の開設した管理委員会の中から幾人かの地方紳士を解任した時、李鴻章はお気に入りの1人を雇おうとした。福州船政局の出身者が乗り込んだ砲艦（Foochow-manned gunboat）は、冬を南方で過ごしたのであるが、李鴻章は、それらの砲艦が南方において保有されたままにならないように、繰り返し関わった。李鴻章は、1879年に性能の劣った「ガンマ（Gammas）」を沈葆楨に送ったときですら、福州で訓練を受けた官員が、沈葆楨の「静かな海域」を航海したのち戻ってくるように周到に準備した。<sup>81)</sup>

1875年から1885年に至るまで、福州では、海外派遣を含めて、訓練活動が継続的に行われた。ところが、これらの活動情況は、ずっと上申されていた。沈葆楨は、ジゲルが要求した海外派遣を計画するに当たり李鴻章と一緒に仕事をした。1877年に沈葆楨と李鴻章は、南北洋大臣として連名で上奏し、急速な技術的進歩を考慮したような進歩的な訓練の必要性を力説した。前学堂の卒業生はフランスに渡るべきであり、後学堂<sup>ごがくどう</sup>〔駕駛管輪学堂ともいう〕の学生はイギリスに行くべきである。沈と李は、中国人1名〔李鳳苞〕とヨーロッパ人1名〔日意格<sup>ジゲル</sup>〕を管理人として、合わせて30名を派遣することを計画した。両名は対等の立場で、船政大臣と南北洋大臣に対し報告することになっていた。何れの分野も3年の教育課程<sup>かういく</sup>が組まれ、その中には理論と実践が含まれていた。定期試験もあった。たとえ、化学、国際法、外交のような他の系統の学問に興味を持つ者が現れても良しとされたにせよ、学生たちは、充分に独り立ちできる造船技術者か海軍司令官として帰国することになっていた。提案は、裁可された。<sup>82)</sup>

中途半端な訓練を行うための海外派遣なら、既に存在していた。ジゲルは、1875年の冬（彼が副官や顧問として船政局に雇われた契約期間後）に、造船に使う原料を購入するためヨーロッパに行った。そしてそのとき、5名の卒業生を連れて行った。1881年に李鴻章が探し当てた福州船政前学堂の卒業生である魏瀚と陳兆翱は、その最初の集団であり、1877年の海外派遣に合流するためヨーロッパで問題に取り組み続けた。<sup>83)</sup>

沈葆楨が、福州船政後学堂の卒業生の一部に対し、既に指揮権を与えていたとはいえ、こうし

たより徹底した海外での訓練が必要であった。1876年に、成長する船政局汽船艦隊の司令官は、李成謀（旧長江水師に戻った）から、福建に属する緑営の羅大春へ移り、それから曾国藩の初期の汽船製造に携わった蔡国祥へと移った。こうした変化の中に、おそらく多少の進歩があったであろう。しかし、そうした転換は、やはり激しすぎた。「揚武」は演習用として使用されていたが、英国人教師は、訓練の受講者の中に派閥争いがあること（広東人は福建人と敵対する）、海軍将校候補生が船の労働で手が汚れるのをひどく嫌がることに気が付いた。「ラブウィング（HMS Lapwing）」〔英国海軍に属する砲船〕のヘンリー・ショア（Henry Shore）は、1876年に船の有様について大部分が苦力、木材、石炭、雑貨店のために使用されていると批評したのであるが、海軍の伝統が欠如しているとも陳べ、全ての受講生が指揮権を引き受けられるかどうか疑問を呈した。福州の学生は、「統領」か或いは艦隊司令官の地位に就く準備をしていなかった。1876年の春に、旧水師出身の呉世忠は、明らかに蔡国祥の交換要員として、その地位に就くことが検討されていた。他方、余りに長く海外にいたことが中国海軍や幹部候補生にとって好ましくないと考える者もいた。

1877年3月末に、2人の長官であるジゲルと李鳳苞は、26名の学生と3人の実習生を連れてヨーロッパに行った。総勢のうち12名が海軍将校であったが、彼らはイギリスに行った。その半数は、のちインド洋やアメリカ合衆国に巡航した英国海軍の船に直ぐに派遣された。これらの学生は、のち大砲と水雷を持って上陸することを教わった。そして、造船所と工場設備を訪問した。沈葆楨が彼らを司令官に任命していなかったにもかかわらず、1874年にジゲルは、学生のうち劉步蟾、林泰曾、蔣超英の3名は、司令官になる準備が出来ていると判断していた。他方、沈葆楨により司令官に任命された卒業生は、1877年の海外派遣の中に含まれていなかった。他の6名の後学堂生は、主にグリーンウィッチ（Greenwich）にある王立海軍学校（the Royal Naval College）で、先ず最初に上陸訓練に入り、それから英国海軍の部隊に入って海外へ行った。このグループの中の1人、嚴宗光（嚴復）は、イギリスで海外職務を得る前に、福州船政学堂で教鞭をとるため呼び戻された。14名の前学堂生のうち、5名は鋳業と冶金の学習に入り、残りはトゥーロン海軍工廠（Toulon Navy Yard）か或いはシェルブール海軍製造学校（the Ecole de Construction Navale in Cherbourg）に入り、それから仏・独・英にある軍事工場を訪問した。1878年に更に6名の実習生が加わった。彼らは、親方による訓練プログラムに入ると共に、よく似た制度の下で学んだ。

その間に福州船政局では、他の学堂卒業生が司令官になっていった。「威遠」（1877）は、当初、水師出身者の周鳳震と与えられた。しかし、旧式の「万年清」における周の地位は、劉步蟾と同じ等級に属した鄭溥泉によって受け持たれた。4箇月の内に、「威遠」は呂瀚の手に渡った。呂瀚が離任したことで「建勝」に生じた欠員には、別の学堂卒業生が置かれた。いずれにせよ、旧水師出身者の一人、鄭漁は、沈葆楨が南洋大臣として南京にやって来た時、沈が南京に連れてきた。しかし、古き時代は過ぎつつあった。船政局での海上訓練は継続し、時には日本への航海を含んでいた。

海上訓練の意義については、意見の相違が存在した。郭嵩燾は、軍事的技能に全てを集中すべきではないと考えた。李鴻章は、工業化の研究も必要であることに同意したが、中国には外国で学んだ学生がほとんどいないと指摘した。曾紀沢は、海軍の海上訓練は中国にとって利益が無い

と公然と主張した。曾の批判は、1879年に発生した。そして李鴻章は、アメリカ合衆国で中国教育使節に対する反対が広がっていることに気が付き、憂慮した。おそらく曾大臣〔出使英国法国欽差大臣〕は、海軍の訓練に関する取り組みを、彼のロンドン公使館の下でイギリスにおいて継続しようと試みた（何璟と黎兆棠は、これが曾紀沢の批評の基礎であると考えた）。李鴻章は、彼自身の北洋海軍学堂を始めようと考えていた。その学堂は、<sup>88)</sup>張成に開校を任されていた。張成は、福州で訓練を積み、李鴻章の擁する砲艦の内の一つで、艦長を務めていた。<sup>89)</sup>

海上訓練に対する抵抗は、継続した。1880年に保守主義者は、当時海外に渡った海軍学生がキリスト教化されており、調査のために委員会が立ち上げられると宣言した。李鴻章は、保守派の陳蘭彬と共に、この委員会の一員であった。陳蘭彬は、若い頃に江南製造局で勤務した経験があるにもかかわらず、<sup>90)</sup>容閔によるアメリカ合衆国への教育使節を頓挫させる手助けをした。1881年に保守主義者は、福州船政局それ自体での訓練教程を攻撃し、幹部候補生はただ歌を唱っているか、絵を描いているだけであると非難した。何璟総督は、彼らは本当に語学や製図を学んでいると答えた。李鴻章は、目立った形では船政局を守ることに立ち入らなかった。その理由は、おそらく李鴻章が彼自身の学堂を計画していたからであるか、或いは福州船政局が李鴻章に訓練を積んだ人材を供給することに充分には協力的でなかったからであろう。

伝統的な訓練方法の方を好む者が多数存在したのは疑いない。旧来の水師は、依然として存在していた。旧来の水師の訓練方法は、福州船政学堂の訓練方法とは対照的であったために、それらは一層滑稽なものとなってしまった。1876年にショアーは、公式の水師が「ラプウィング」を訪問するのを見た。そして、ピンク色のキャラコで着飾った大砲を搭載した汚い軍用帆船について書いた。船の乗組員がよたよた歩いたせいで、厳粛なはずの式典は、大失敗になった。ショアーは、その乗組員は「全く致命的であった。もしロンドンの舞台監督が、茶番劇のシーズンのために、ただ儲けか何か——もちろんな鎌<sup>がま</sup>や三つ又のやすを含めて——を手に入れられるというのなら、劇場〔の評判〕を落とすだろう」と言った。<sup>91)</sup>

保守派から攻撃されたにもかかわらず、1881年に李鴻章は、福州船政局による訪欧使節の第二次派遣が必要であると主張した。しかし李鴻章は、彼自身の新設学堂に教師志望者の4名を採ったため、たった2名の海軍将校だけが、その使節の中に含まれた。より規模が小さくなったこの第二次海外グループのうち、他の7名は、建造の分野に属していた。造船に専念したのは、そのうちただ1名<sup>92)</sup>だけであった。この3年間の努力は、海軍の自強運動の活動に対しほとんど貢献しなかった。

清仏戦争直前に福建船政大臣であった張佩綸は、船政学堂における頹廢について上奏した。そして、有能なイギリス人指導者に手綱を引き締めてもらうことで、それを食い止めたいと望んだ。1873年、船政学堂には300名以上の学生がいた。ところが、1884年には188名しかいなかったし、大部分は前学堂に属していた。新設校は、戦時中に建てられた。そして李鴻章は、新たに海外使節を要求したが、記録は拒否されたことを示している。<sup>93)</sup>

李鴻章は、彼自身の海軍学堂を設立する以前から、そうした活動の中に含まれる幾つかの制度上の問題だけでなく、訓練の必要性について長らく気が付いていた。1860年代に、李鴻章は、西洋では技術的に有能な人材が「役人」になれるのに対し、中国では軍人と学者は伝統的に切り離されていると書いていた。1867年に李鴻章は、「小さな海賊」——日本人——が海軍の船上では

外国人無しで済ませていたことを認めた。そして1870年に李鴻章が行った中国教育使節（China Educational Mission: C. E. M.）への支援は、陸海軍の人材を生み出すとの期待にある程度基づいていた。<sup>94)</sup> 李鴻章の関心は、陸軍に偏っていた。ところが、李鴻章は、訓練は単なる教練より以上のものでなければならないこと、そして公務員試験は、西洋の学課試験に順応させられねばならないことを知っていた。李鴻章は、中国人をウェストポイント（West Point）〔アメリカ陸軍士官学校〕<sup>95)</sup>に入学を許されるようにも努めた。

1875年に李鴻章がハートを通じて砲艦を注文したとき、訓練を積んだ海軍将校への李鴻章の関心は、積極的になっていた。天津における李鴻章の水雷工場（1876年）〔天津機器局内に付設された電気水雷局〕<sup>94)</sup>は、訓練の中心であった。1878年に李鴻章は、彼の最初の4隻のアームストロング製「ガンマ」を受け取った。それらの船は、水師督操の許鈴身に率いられて、福州船政学堂の卒業生により李鴻章にもたらされた。その年李鴻章は、水軍の一つを創設し、艦隊司令官として提督〔緑営兵より成る水師の長官〕の丁汝昌を引き入れた。それと並行して、天津に海軍營務処（an Office of Naval Affairs）<sup>96)</sup>を設立した。1880年に、李鴻章は、天津に水師学堂を創設した。

当初、李鴻章は学堂長に呉贊誠を望んだ。呉贊誠は、輪船招商局で李鴻章と関わりを有し、福建船政大臣であった。しかしながら、呉贊誠は、天津機器局の総辦を引き継いだ。そして、李の学堂の初代学長は嚴復であった。嚴復は、福州から福州船政学堂の規則の写しを一緒に持ってきた。当初、嚴復は、当時直隸にいた海関道吳仲翔の補佐官として仕えていた。<sup>97)</sup>

李鴻章は、海関から3名の外国人官吏も、彼らを北洋艦隊に就役させることで自分の学堂のために借用した。李鴻章の補佐官のうちのもう1人は、若き米国人アーリントン（L. C. Arlington）であった。アーリントンは教練の指導員で、毎日朝早く報告して李鴻章を驚かせた。毎日の仕事は、たったの2時間であった。アーリントンは、自分の学生は「有望で、賢明な人達」であると言った。<sup>98)</sup> 1880年に李鴻章は、沈葆楨から得た上等な砲艦「エプシロン」を得ると共に、福州で訓練を積んだより多くの将校を獲得した。そして、1881年に李鴻章は、李自身が主催した第2次海外使節のため名簿に載せた上位4名の福州の卒業生を確保した。

1881年、天津水師学堂の学舎が完成した。李鴻章の最初の学生は「帰国者」であったが、明らかにアメリカから呼び戻されたばかりの中国教育使節（C. E. M.）の学生もいた。のちに李鴻章は、海軍技術教程に供給するために水雷学堂を組織した。<sup>99)</sup> これらの旧式の学校は、広東や福建の遠きところの出身の人材を、約20のクラスで訓練した。こうして李鴻章は、デッキと技術部門を持ち、それぞれ「内部」と「外部」の部局を備えた完全な学園を発展させた。「内部の」部局は、英語、中国古典、地理、天文、航海、及び他の理論的課目であり、福州の学堂で提供されていたものと同様の課目であった。「外部の」部局は、通信、砲術、集団教練などが扱われ、訓練船上で教えられる課目も付いていた。

李鴻章の規則は、新入生が17歳以下であること、普通の作文を書く能力があること、父の家系を四世代申告すること、両親と「天津の紳士」から保証書を書いてもらうことを要求した。5年の教程期間中、将校候補生は結婚しないし、科挙試験を受けることができない。何故なら、「彼らに適した学習の妨げになるといけない」からである。3箇月の見習い期間中、候補者は1箇月に4両を支給された。週7日の授業日のうち2日間、将校候補生は中国語を学習しなければならない。李鴻章の代理人は、春・夏・秋毎に試験を実施し、李自身は、毎秋に試験を行うことにな

っていた。優秀な学生は任務を獲得し、「標準より以下」の学生は、衣服と名誉進級と共に報奨金を得ることになっていた。休暇は福州船政学堂と同じくらい少なかった。

先述の事業は1882年に天津で出版されたが、それは実質上の広報活動に等しかった。「教師の能力が劣り」、なかには年齢が高すぎる者もいたからか、或いは給付金が当初1箇月にたったの1両であったのが理由で、学堂の最初の年は散々だった。1882年に李鴻章は、福州船政学堂を範例にして、大規模な将来性を正式に公表した。福州船政学堂では「良家の子弟が学んできており、終業後は將軍に成った。中には現在第二、第三ランクの役人もおり、叙勲されてきた」と。李鴻章は、彼の卒業生のために皇帝から恩典を請求することを約束した。明らかに李鴻章は、役人と競争していた。1882年の中頃、李鴻章は1人の友人に手紙を書き、西洋の学問が非常に重要だからと、息子を天津水師学堂に入学するよう助言した。西洋では海軍の間は地位が高い、より数多くの船が得られるにつれて、中国も同様になると、李鴻章は書いた<sup>101)</sup>。

長年の間、李鴻章の学堂は、福州船政学堂への依存を打ち破ることが出来なかった。ヨーロッパから購入した船を彼自身の船員と共に連れ戻そうとする李鴻章の試みは、1880年末に現れた。その時李鴻章は、アームストロング製の巡洋艦である「揚威」と「超勇」を受け取るために、丁汝昌をイギリスに派遣した。曾紀沢は、儀礼的な旗の掲揚に参列した。そして、1881年8月9日に、2隻の船は、本国に向けて勇敢にニューキャッスルを出航した。不幸なことに、丁汝昌は、その後自分の船を浅瀬に入れた。「揚武」は石炭切れとなり、2日間地中海の近くを漂流した。李鴻章は、この仕事で自分の人員を幾分拡大し過ぎていた。「揚武」と「超勇」が到着したとき、李鴻章は、座礁事件の後、鄧世昌<sup>とうせいしょう</sup>を早い内に司令官から解職したにもかかわらず、船は福州船政学堂の同級生たる林泰曾と鄧世昌<sup>102)</sup>に委ねられた。

李鴻章が南への依存を強いられたことは、これらの南方人が自分の経歴を北で作り上げたため、昔からの省への忠誠心を腐食させる効果があったかも知れない。しかし1882年に、シューフェルトは、李鴻章の海軍について、「海軍の階級が無く、そのために団結心が欠如している。船員たちには、海軍の経験が無く、外側の世界についての知識が足りない。出身省の異なる乗組員は一致協力しようとしな。勇氣と突進力は愛国心と国旗だけが創出できるのであるが、それが欠如している。根深く根絶が不可能な財政上の腐敗行為が蔓延している——これら全てが積み重なって船の品質を損ない、戦力的に無価値なものにする」と陳べている。それにもかかわらず、訓練を積んだ人材が不足していた。この時期に就いては、後に、「卒業生は皆、中国に戻った。南北洋通商大臣は、彼らを最初に競って雇い入れようとした」と陳べられた<sup>103)</sup>。

李鴻章が自分の海軍の設立に向けて長官を探し求めるに当たり、政治的な配慮が影響を与えた。1880年の初めに、ハートは、李鴻章の艦隊のために英国人将校を雇うことを要求した。同時に、グラント (U.S. Grant) の親戚が、北京に派遣されたドイツ人聖職者の義兄弟として、李と共にする軍隊の地位<sup>ポスト</sup>の候補者であった。イギリスは、特に海軍長官 (naval directorate) を望んだが、李鴻章は、その人物が何処にいようと、適材を見つけ出すことを厭わなかった。1880年8月に、米国海軍のロバート・W・シューフェルト (Robert W. Shufeldt) が、李鴻章の招きで、外交使節として天津に滞在していた。李鴻章は、シューフェルトに北洋艦隊を組織してみたいかどうか尋ねた。秘密交渉は、1年続いた。シューフェルトが頻りに李鴻章の船を訪れたので、他の外国人たちは、その米国人が地位を獲得したと確信した。しかし、おそらくロシアのイリ撤退後、中国の

情況が緩和したため、李鴻章は、[人事を]はぐらかすようになった。結局シューフェルトは、嫌気がさしてしまい、李の下を去った。シューフェルトは、天津は陰謀の巢窟であると陳べた。総税務司(ハート)とグスタフ・デトリングが、海軍をめぐり互いに競争していた。王立海軍の「準将校」たる3名の英国人税務司は、その時ですら李の艦隊の艦上にいた。フランス海軍に属する2名の元将校は、「明記されていない目的」のために、李により高い報酬を得ていた。シューフェルトは、「総督[李鴻章]は、外側の世界の知識を除いた全ての物事には抜け目がないが、幾分追従者の餌食か、或いは彼が海軍を持つように勧める、これら大志を抱く人々による奸計の犠牲者である」と付け加えた。<sup>104)</sup>

結局、李鴻章は、王立海軍のラング(W. M. Lang)を雇用することで合意し、ハートが勝利を取めた。ラングは、李の最初の砲艦「ガンマ」を中国に持ってきた。李鴻章は、1879年以来ずっとラングに興味を持っていた。1882年4月にハートは、至急ロンドンのキャンベル(Campbell)に電報を打った。「私は、ラング司令官のために、天津で可能な最も高い海軍の地位を獲得した。ラングは躊躇していた。海軍の経歴に傷が付かないか心配したからだ。……海軍・国家・政治的な見地から、ラングに引き受けるよう勧めることが重要だ。<sup>105)</sup>」

ラングは「口説かれた」にもかかわらず、清仏戦争のために呼び戻される前に、仕事をする時間は全くなかった。そのとき李鴻章は、李鳳苞に問い合わせた。そして、彼を通じて伝えられるところでは、ちょうど南北戦争の時に、海軍の経験を有すると噂される1人のドイツ人を雇った。李鳳苞はこの男、シーベリン(Siebelin)をずっと誤解していたことが明らかになった。シーベリンは、それまでずっと小型船の船長であったというだけで、海軍の専門家ではなかった。それなのに、新しいドイツ製戦艦の一つである「鎮遠」の船長になる予定であった。清仏戦争後、その姉妹船とともに「鎮遠」が引き渡された時、李鴻章は、シーベリンにその戦艦を渡さなかった。戦争中にシーベリンが果たした役割は、小さかった。彼は、中国語を解しなかった。学生は、シーベリンを「その身体は剣に満ちているが、一つとして鋭い剣はない」人物と見なした。<sup>106)</sup>

清仏戦争は、李鴻章の船を呼ぶ声で満たされたが、戦争は李自身の人材を見定める試験ではなかった。なぜなら、主に李鴻章が自分の船を温存したからである。李の船は、中国教育使節(C. E. M.)の「ボーイズ」であった8名を含めて、彼の天津学堂の約36名の卒業生のうち幾人かが配備されていたはずである。戦争開始前の短い時間を除いて、海軍の訓練は南が独占していた。福州で訓練を受けたものは、ゆっくりと船長として旧水師の人間に取って代わった。しかし、戦争記録における14名の船長のうち、南洋の船だけでなく北洋の船のために、ただ8名だけが近代的な訓練を受けていたに過ぎない。これらのうち5名は、1873年にジゲルによって司令官になる準備ができていたと宣言されていたが、戦争前に実際に指揮権を持っていたのは、たった2名だった。船長のうち誰もかつて中国教育使節(C. E. M.)の学生ではなかったように思われる。福州の船長のうちの一人が、海上での経験を有するとともに、太湖でもずっと水師の副官であったとする記事があるにもかかわらず、以前の水師の船長は、大部分が記録の上で無名なのである。<sup>107)</sup>

海軍の訓練は、制度上の摩擦により妨げられた。問題は、科挙試験に適應させられた社会において、将校候補生と将校のために発憤材料<sup>インセンティブ</sup>を創出し、維持することであった。海軍将校は社会的に孤立していたが、このことが彼らの態度や性向にどのような影響を与えるのかは、間接的に示唆されるに止まった。一つの逸話によく表れているかも知れない。1876年、ショアーは廈門を歩

いていた。すると、バス・ビール、麦芽黒ビール、ベルモット酒をぶら下げ、ピクニックをしている退役海軍将校の一行がやって来た。1人は、台風で台湾の沿岸に打ち上げられた砲船の元船長であった。シヨアーは、失敗は彼の過失ではないが、彼は首を切られる寸前だったと陳べた。この光景は、どうしようもない怠惰を示しているように思われる。ところで、昇進を待つ英国海軍の艦長の経歴上通例となっている退任後の隙間<sup>すきま</sup>で現れるよりも、中国海軍将校の経歴の上で明らかにより早い時期に現れるように思われる。それは、政治的に危険な時間の過ごし方（そして寧ろ中国人の奇妙な飲み方の嗜好<sup>108</sup>）をも示している。

## 註

- 1) Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, Seattle, 1964, pp. 160-162, 169-172. Hummelに収められた関連の伝記にも、時折言及されている。
- 2) 『籌弁夷務始末』同治朝、巻98、23～27頁、に載せられた広東巡撫張兆棟<sup>ちやうちやうとう</sup>の上奏文の中に丁日昌の建議が含まれている。張兆棟は、1874年10月17日から翌年9月1日まで署両広総督を兼務していた。〔訳註：広東巡撫張兆棟による代理総督兼任は、瑞麟<sup>ずいりん</sup>の死去に伴う人事であった。本来は英翰<sup>えいがん</sup>（満人）が就くはずであったが、英翰は解職されたため、署両江総督<sup>りやうこうんいつ</sup>の劉坤一が異動してくるまでその任を務めた。〕文彬の上奏文は、『籌弁夷務始末』同治朝、巻98、31～34頁。
- 3) 李鴻章の反応については、Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp. 179-181, を参照のこと。
- 4) 洗玉清「清季海軍之回溯」『東方雑誌』第38巻、第11号、29～33頁（1941年6月15日）、は、資金の1875年の日付を教えてくれる。四成洋税からそれがもたらされることを認可したそれに関する論評については、1877年1月30日文煜<sup>ぶんいく</sup>による総理衙門宛の意見書、及び1877年3月9日付の沈葆楨による建議については、中央研究院近代史研究所編『海防档』乙、福州船廠、下、724頁、を参照のこと。「復丁雨生中丞」光緒三年三月二十一日、『朋僚函稿』巻17、4頁。〔訳註：翻訳に際し『朋僚函稿』の典拠を示す場合、呉汝編編『李文忠公（鴻章）全集』（文海出版社影印版）に所収のものを使用した。〕
- 5) 池仲祐『海軍大事記』（左舜生『中国近百年史資料続編』1933年、所収）、327～328頁。
- 6) 『清史稿』兵志6、水師、8頁、は、李朝斌<sup>りちやうひん</sup>が司令官に指名されたことに触れるが〔訳註：「光緒四年……吳淞口為南北海疆適中之地、乃命江南提督李朝斌為外洋兵輪統領、督率各省大小兵輪、定期在吳淞口会操。』『清史稿』中華書局標点本、第14冊、3993頁〕、李の書簡はこの年、そうした地位にハートを任命することについて妨害があったことに触れる。ハートも同様に言及していたに違いない。以下に挙げる李鴻章の書簡を参照のこと。「復沈幼丹制軍」（沈葆楨に宛てた返信）光緒五年八月十一日（1879年9月26日）、『朋僚函稿』巻18、37～38頁。「復李丹崖星使」（李鳳苞<sup>りほうほう</sup>に宛てた返信）光緒五年九月初四日（1879年10月18日）、『朋僚函稿』巻19、1頁。「復曾劼剛星使」（曾紀沢<sup>そうきたく</sup>に宛てた返信）光緒五年九月初五日（1879年10月19日）、『朋僚函稿』巻19、1～3頁。「復沈幼丹制軍」光緒五年八月十一日（1879年11月30日）、『朋僚函稿』巻19、4頁。
- 7) Li Chien-nung, *The Political History of China, 1840-1928*, tr. Ssu-yü Teng and Jeremy Ingalls, New York, 1903, pp. 113-114, pp. 123-124.
- 8) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p. 496, n. 72. 姚錫光「東方兵事紀略」（左舜生『中国近百年史資料続編』所収）、195頁、は、薛福成<sup>せつふくせい</sup>と李鴻章がハートを指名するのに反対したことに言及する。〔訳註：「…総署逐議以赫德總司南北海防。道員薛福成謂赫德陰鸞專利、兵權餉權盡入其手、甚非計、遺書李鴻章争之、鴻章悟、議始罷。」とある。〕スタンレー・ライトは、これを確認している（481頁）。シューフェルト<sup>エビソード</sup>の挿話は、P. H. Clyde, *United States Policy Toward China* (Chapel Hill, N. C., 1940), item 23, "Shufelt's Indictment of China."
- 9) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p. 490. 『清季外交史料』巻32、7頁。

- 10) Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp. 185-187. 1884年3月11日付の李書簡に拠る。
- 11) Teng and Fairbank, Doc. 34, pp. 124-125. Li Chien-nung, *The Political History of China, 1840-1928*, p. 124.
- 12) Clyde, *United States Policy Toward China*, p. 162. 南における李鴻章の影響力については、重要な南の場所に、李は自分の代理人を持っていたことに注意せよ。例えば、『清季外交史料』巻48, 1頁, に、彼の「福州局」から李鴻章に宛てて1884年11月2日に送られた基隆陥落に関する電信があるので、参照のこと。また、李鴻章から軍機処に宛てた1884年8月18日付の電信については、『清季外交史料』巻44, 24頁, を参照のこと。その中で李鴻章は劉銘伝からの書簡を伝えた。その書簡は、台湾の救援に向けた物資を得るのに携わっていた、上海に在留する彼の代理人から摘要として受け取っていたものであった。
- 13) 1868年における瑞麟の報告については、『籌辦夷務始末』同治朝, 巻55, 5～6頁, を参照のこと。付表Dは、瑞麟による10隻の砲艦を載せるが、確認しても不確かなものには、「?」を付けている。丁日昌の主張については、『籌辦夷務始末』同治朝, 巻74, 15頁, を参照のこと。
- 14) 1871年初めの報告については、『籌辦夷務始末』同治朝, 巻79, 46頁。〔訳註：この李鴻章の献策は、咸豊3年（1853）に粵逆（太平天国軍）が北上した時や、同治7年（1868）に捻匪（捻軍）が北犯した時に、天津域に危険が迫ったことや、咸豊10年（1860）に英仏連合軍が海口を突破し、天津域・通州へ侵攻した際、それを阻止できなかった経験に鑑みてなされたものである。〕
- 15) 防衛案の例として以下を参照のこと。文煜と王凱泰による建議は、『籌辦夷務始末』同治朝, 巻96, 22～25頁。瑞麟による建議は、同書, 巻97, 10～12頁。丁日昌による建議は、同書, 巻98, 23～27頁。瑞麟は、旧式の船は充分ではないと陳べた。丁日昌は、大型船を要求した。文祥の建議と添付された上諭については、同書, 巻98, 40～41頁。
- 16) Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp. 172-178. 屯田兵（soldier-farmer）の考えについては、「復錢調甫中丞」（錢鼎銘に宛てた返信）光緒元年正月初七日（1875年2月12日）、『朋僚函稿』巻15, 2頁, を参照のこと。後に李鴻章は、西方への遠征費は切り詰められるべきではないと論じた。「復鮑華潭中丞」光緒元年二月十日（1875年3月17日）、『朋僚函稿』巻15, 10頁。
- 17) 1874年9月17日付でハミルトン・フィッシュに宛てたS. W. ウィリアムズのレポート, *Foreign Relations of the United States (1875)*, I, 200. 文祥については, Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, p. 90. 〔訳註：同治十三年七月十八日恭親王奕訢は、円明園の再建工事は「一二千万」を投じなければ成し遂げられないが、「物力艱難」な現状でこれほど巨額の費用は調達できないと進言した（中国第一歴史档案館編『円明園』上海古籍出版社, 1991年, 上冊, 739～740頁）。本文中に恭親王が「免職」させられたというのは、親王の世襲を革去し、郡王に降格とすると共に、その子載澂の貝勒郡王位を剥奪したことを指すと思われる。なお、この事件は、翌日に東西兩太后が親王の世襲とその子載澂の爵を償還したことで収められたように思われる。「恭忠親王奕訢」『清史稿』列伝8。郭廷以『近代中国史事日誌』上冊, 591頁。〕
- 18) 『籌辦夷務始末』同治朝, 巻99, 13～31頁。〔訳註：この典拠の中で、李鴻章は船の名前を挙げていないが、「滬廠」（江南製造局）で製造された船のうち500馬力のものとして、鎮海と馭遠の2隻が知られている。〕
- 19) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, pp. 467-470.
- 20) Shore, *The Flight of the Lapwing*, p. 504.
- 21) 「復丁雨生中丞」（丁日昌に宛てた返信）光緒元年正月十四日（1875年2月19日）、『朋僚函稿』巻15, 6～7頁。「復沈幼丹節帥」光緒元年四月十五日（1875年5月19日）、『朋僚函稿』巻15, 12～13頁。「復沈幼丹制軍」光緒元年四月二十九日（1875年6月2日）、『朋僚函稿』巻15, 15～16頁。「復沈幼丹制軍」光緒元年七月十九日（1875年8月19日）、『朋僚函稿』巻15, 21～22頁。「復沈幼丹制軍」光緒元年十一月十九日（1875年12月16日）、『朋僚函稿』巻15, 33～34頁。「復沈幼丹制軍」光緒二年正月二十六日（1876年2月20日）、『朋僚函稿』巻16, 3～4頁。



- 22) 註21で引いた沈葆楨宛の書簡を参照のこと。「復呉春帆京卿」（呉賛誠に宛てた返信）光緒二年八月二十三日（1876年8月10日）、『朋僚函稿』巻16、23～25頁。
- 23) 「薛福成」、Hummel, *Eminent Chinese of the Ch'ing Priod*, pp. 331-332.
- 24) 1876年10月30日付、セワードからフィシュへ、*Foreign Relations of the United States* (1877), pp. 80-82. [以下この史料は、*FRUS*と略記する。]
- 25) 「復沈幼丹制軍」光緒二年八月二十七日（1876年10月14日）、『朋僚函稿』巻16、26～27頁。1876年10月30日付、呉賛誠宛の書簡は、「復呉春帆京卿」（光緒二年九月十四日）、『朋僚函稿』巻16、29～30頁。「復呉春帆京卿」光緒二年十月十五日（1876年11月30日）、『朋僚函稿』巻16、33～34頁。「復丁雨生中丞」光緒三年五月二十一日（1877年5月14日）、『朋僚函稿』巻17、12頁。
- 26) 「復郭筠僊星使」（郭嵩燾に宛てた返信）光緒三年四月初二日（1877年5月14日）、『朋僚函稿』巻17、8～9頁。Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p. 476. 李鳳苞が李鴻章のために内密に同じ事をしていた時、おそらくジゲルは沈葆楨に尋ねていた。ジゲルが沈のためそのような船を実際に2隻購入した証拠はない。
- 27) 「復何筱宋制軍」（何璟に宛てた返信）光緒三年七月十一日（1877年8月19日）、『朋僚函稿』巻17、17頁。「復呉春帆京卿」光緒三年八月十五日（1877年9月21日）、『朋僚函稿』巻17、19～20頁。「復呉春帆京卿」光緒三年九月初三日（1877年10月9日）、『朋僚函稿』巻17、22～23頁。「復呉春帆京卿」光緒四年正月初八日（1878年2月9日）、『朋僚函稿』巻18、3～4頁。
- 28) 「復呉春帆京卿」光緒三年十月初六日（1877年11月11日）、『朋僚函稿』巻17、29～30頁。新しい造船所の可能性と費用について言及しているのは、〔前掲〕「復呉春帆京卿」光緒三年八月十五日（1877年9月21日）、及び「復呉春帆京卿」十一月二十日（1877年12月24日）、『朋僚函稿』巻17、39～40頁。「復郭筠僊星使」光緒三年十一月初四日（1877年12月8日）、『朋僚函稿』巻17、35～36頁。砲艦に関する事柄について言及しているのは、〔前掲〕「復呉春帆京卿」光緒四年正月初八日（1878年2月9日）。
- 29) 〔前掲〕「復呉春帆京卿」光緒四年正月初八日（1878年2月9日）。呉賛誠から総理衙門へ、1878年2月10日、『海防档』乙、福州船廠、下冊、753頁。
- 30) 包遵彭『中国海軍史』（台北、1951年）、209～210頁。
- 31) 何璟に宛てた書簡（1878年3月13日）の中で、そのファンドはトリックであると主張している。「復何筱宋制軍」光緒四年二月初十日、『朋僚函稿』巻18、8～9頁。〔訳註：この典拠の文中で、李鴻章は、被災民を救済するべく、前年九月（旧暦）から山西に10万石の食糧を運んでいるが、今度は河南にも3万石の白米を運ぶことになった、その費用の12万両は海防経費の内部留保のなかから充てられるのであるが、このように国内外で発生した問題を解決するために次々と負担が課せられることになると、南洋海防経費の全額が天津に送られて来たとしても、鉄甲艦を購入するための資金を蓄えることはできない、と陳べている。原著者が「中央政府のトリック」と呼ぶのは、このような経緯を指すものと考えられる。〕「復呉春帆京卿」光緒四年二月十六日（1878年3月19日）、『朋僚函稿』巻18、9～10頁。
- 32) 呉から軍機処へ、1878年8月8日、『海防档』乙、福州船廠、下冊、762頁。「復呉春帆京卿」光緒四年四月初十日（1878年5月11日）、『朋僚函稿』巻18、13～15頁。
- 33) 1878年8月5日付、呉から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、下冊、769頁。
- 34) 包遵彭『中国海軍史』（台北、1951年）、209～210頁。池仲祐『海軍大事記』328頁。
- 35) 1879年3月9日付、沈の報告、『海防档』乙、福州船廠、下冊、785頁。
- 36) 「復李丹崖星使」光緒五年六月初九日（1879年7月27日）、『朋僚函稿』巻18、31頁。「復沈幼丹制軍」光緒五年六月二十四日（1879年8月11日）、『朋僚函稿』巻18、32～33頁。
- 37) 「復沈幼丹制軍」光緒五年八月十一日（1879年9月26日）、『朋僚函稿』巻18、37～38頁。「復李丹崖星使」光緒五年九月初四日（1879年10月18日）、『朋僚函稿』巻19、1頁。「復曾劼剛星使」光緒五年九月初五日（1879年10月19日）、『朋僚函稿』巻19、1～2頁。

- 38) 「復沈幼丹制軍」光緒五年十月十七日 (1879年11月30日), 『朋僚函稿』 卷19, 4頁。「復曾劄剛星使」十月二十四日 (1879年12月7日), 『朋僚函稿』 卷19, 5頁。
- 39) 呉から総理衙門へ, 1879年8月17日, 『海防档』 乙, 福州船廠, 下冊, 816~817頁。
- 40) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p.476. その船は, 超勇と揚威である。
- 41) 「復周福陔中丞」(周恒祺に宛てた返信) 光緒五年十二月二十六日 (1880年2月6日), 『朋僚函稿』 卷19, 8頁。
- 42) 「復譚文卿中丞」(譚鐘麟に宛てた返信) 光緒六年正月初七日 (1880年2月16日), 『朋僚函稿』 卷19, 9頁。「復周福陔中丞」光緒六年正月十九日 (1880年2月28日), 『朋僚函稿』 卷19, 9~10頁。山東省の購買については, Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p.475. それに, 池仲祐『海軍大事記』328頁, を参照のこと。ライトは, 広東省の購買にも言及している。
- 43) 「復李丹崖星使」光緒六年二月二十日 (1880年3月30日), 『朋僚函稿』 卷19, 10~12頁。
- 44) 「復何筱宋制軍」(何璟に宛てた返信) 光緒六年二月二十三日 (1880年4月2日), 『朋僚函稿』 卷19, 12~13頁。
- 45) 「復黎召民京卿」(黎兆棠に宛てた返信) 光緒六年七月二十一日 (1880年8月28日), 『朋僚函稿』 卷19, 28~29頁。
- 46) 「復李丹崖星使」光緒六年四月十七日 (1880年5月25日), 『朋僚函稿』 卷19, 23~24頁。「復何筱宋制軍」光緒六年五月初三日 (1880年6月10日), 『朋僚函稿』 卷19, 24頁。「復李丹崖星使」光緒六年六月初七日 (1880年7月13日), 『朋僚函稿』 卷19, 25~26頁。福建省政府は, 60万両を調達した。造船所の歳入よりも多かった。1880年9月22日付, 李鴻章から総理衙門へ, 『海防档』 乙, 福州船廠, 下冊, 861頁。
- 47) 「復張幼樵侍購」(張佩綸に宛てた返信) 光緒六年八月初六日 (1880年9月10日), 『朋僚函稿』 卷19, 29~30頁。「復李丹崖星使」光緒六年八月十七日 (1880年9月21日), 『朋僚函稿』 卷19, 30~31頁。
- 48) 「復劉省三軍門」(劉銘伝に宛てた返信) 光緒六年九月十八日 (1880年10月21日), 『朋僚函稿』 卷19, 33~35頁。
- 49) 1880年11月19日付, 黎兆棠から総理衙門へ, 『海防档』 乙, 福州船廠, 下冊, 865頁。「復李丹崖星使」光緒六年十一月初二日 (1880年12月3日), 『朋僚函稿』 卷19, 36~37頁。「復黎召民廉訪」光緒六年十一月初二日, 『朋僚函稿』 卷19, 37頁。「復黎召民廉訪」光緒六年十二月初六日 (1881年1月5日), 『朋僚函稿』 卷19, 40~41頁。ロンドン公使館への専門的な問題については, Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, p.445. を参照のこと。そのうえドイツの造船所への転換は, 中国における政治的競争を伴った。ハートは, 外交問題では(ハートが責任を負う)総理衙門に話を集めることを望んだが, 李鴻章はできる限り権力を彼自身的手中に持ち続けることを好んだ。そして, ハートに対抗するため, ドイツ人のデトリングを頼りにした。Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, p.534.
- 50) 李鴻章は, 3隻の軍艦を得てはいなかった。李がドイツから購買する軍艦のうちの一つは濟遠であった。濟遠は, 236フィートの鋼で装甲されていない2,300トンの艦艇であった。他の2隻は, 7,500トンの軍艦である定遠と鎮遠であった。いずれの軍艦も, 清仏戦争後にはじめて納入された。李鳳苞は, これらの船を競争入札する際に鋭敏な実践を行った。Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, pp.476-477. を参照のこと。「復黎召民廉訪」光緒七年二月初二日 (1881年3月1日), 『朋僚函稿』 卷20, 3~5頁, も併せて参照のこと。
- 51) 「復黎召民京卿」光緒七年四月二十五日 (1881年5月22日), 『朋僚函稿』 卷20, 6~7頁。「致丁稚璜宮保」(丁宝楨に宛てた書簡) 光緒七年六月初四日 (1881年6月29日), 『朋僚函稿』 卷20, 9~10頁。「復李丹崖星使」光緒七年八月十七日 (1881年10月9日), 『朋僚函稿』 卷20, 18~19頁。
- 52) Spector, *Li Hung-chang*, pp.171, 181-183, は, 中央政府と李鴻章との間の競争について論じ, 李鴻章が自分の私的軍隊を保持しているとする。李の海軍学校の監督の一人, 馬建忠は, 『小方壺齋輿

- 地叢鈔』71巻（1897年）に収められた『勘旅順記』の中で、李の軍隊の腐敗について描写している。馬建忠が訪れたのは、1881年4月25日のことである。
- 53) 1881年11月26日付、黎兆棠から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、下冊、894頁。
- 54) 「致李丹崖星使」（李鳳苞に宛てた書簡）光緒七年十一月二十二日（1882年1月11日）、『朋僚函稿』巻20、20～21頁。「復李丹崖星使」光緒八年正月十八日（1882年3月8日）、『朋僚函稿』巻20、22～23頁。「復李丹崖星使」光緒八年九月初九日（1882年10月20日）、『朋僚函稿』巻20、31～33頁。
- 55) 1882年5月25日付、黎兆棠から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、下冊、910頁。〔訳註：黎兆棠の申し出に対し、1箇月の休暇が認められたが、福建船政大臣の辞職願については却下された。〕
- 56) 対日問題の発展については、Tsiang, T. F. “Sino-Japanese Diplomatic Relations, 1870-1894,” *Chinese Social and Political Science Review*, 17.1: 1-106 (1933). を参照のこと。海防経費に関する論評については、『清季外交史料』巻29、22～24頁、に見える、1882年の李上奏を参照のこと。李鴻章の軍事力を削減するについては、Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, p. 120. に見える、1880年における李書簡の翻訳を参照のこと。
- 57) 「復李丹崖星使」光緒八年九月初九日（1882年10月20日）、『朋僚函稿』巻20、31～33頁。「復黎召民京卿」光緒八年九月二十八日（11月8日）、『朋僚函稿』巻20、33～34頁。1882年12月5日付、総理衙門への黎兆棠の報告も併せて参照のこと。『海防档』乙、福州船廠、下冊、932頁。
- 58) 1883年1月22日付、総理衙門に宛てた左宗棠の報告については、『海防档』乙、福州船廠、下冊、934頁。1883年2月1日付、総理衙門に宛てた黎兆棠の報告については、同書、935～938頁。張夢元の指示については、同書、948頁。
- 59) 1883年9月6日付、張夢元から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、下冊、982頁。保守派による攻撃に関しては、次章を参照のこと。
- 60) 1871年5月20日付、曾国藩から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、上冊、242頁。統合性に欠けた購買に関する二三の例は、これで満足しなければならない。張之洞は、ドイツ企業から500万ポンドを借りようと試みた（『清季外交史料』巻44、23頁、及び巻52、15頁）。呉淞と江陰の港のため曾国荃が購買した大砲は全部で8門であったが、その費用は、瑞麟が1860年代後半に6隻の砲艦のために費やした費用のほとんど二倍であった（『清季外交史料』巻46、14頁）。
- 61) Clyde の項目23、「シューフェルトの中国告発」。そして、「復李丹崖星使」光緒八年九月初九日（1882年10月20日）、『朋僚函稿』巻20、31～33頁。
- 62) 曾国荃への指令は、『清季外交史料』巻38、5～6頁。曾の返答は、『清季外交史料』巻38、22～23頁。徐廷旭の報告は、『清季外交史料』巻38、23～24頁。
- 63) 「復沈幼丹節帥」光緒元年四月十五日（1875年5月19日）、『朋僚函稿』巻15、12～13頁。外国人の観察者は、シプリアン・ブリッジ (Cyprian A. G. Bridge) であった。“The Revival of the Warlike Power of China,” *Frasers Magazine* (June 1879), pp. 778-789. を参照。
- 64) 軍備に関する情報の出典は、『船政奏議彙編』巻1、14頁、及び巻8、4頁、に所載の文煜・沈葆楨報告。そして、“Vladimir,” *The China-Japan War* (New York, 1896), p. 77. また、Shore, *The Flight of the Lapwing*, Chap. 7. 張佩綸の報告書は、『清季外交史料』巻46、21～22頁。
- 65) 不発弾については、『清季外交史料』巻48、15～16頁、に見える上諭を参照のこと。曾紀沢の論評については、『清季外交史料』巻49、12頁。
- 66) Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, pp. 248-251.
- 67) 『清季外交史料』巻45、25～26頁。〔訳註：この電信で李鴻章は、天津機器局の製造した水雷は、ただ能く旅順、北塘、大沽各港での使用に供するのみとしている。〕
- 68) 沈葆楨と左宗棠の工場施設については、Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, pp. 165-166. マカートニーの解雇については、Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, pp. 199-241.
- 69) 『江南製造局記』巻5、に所載の表。
- 70) 郭嵩燾については、「復沈幼丹制軍」光緒元年四月二十三日（1875年5月27日）、『朋僚函稿』巻15、

15～16頁〔訳註：文海版で見当たらず〕。丁日昌については、「復沈幼丹制軍」光緒元年七月十九日、『朋僚函稿』巻15、21～22頁、及び「復沈幼丹制軍」光緒元年八月二十九日、『朋僚函稿』巻15、29頁〔訳註：原書で挙げられた典拠のうち一件が見当たらず〕。丁日昌が長官と福建巡撫を兼任するのは荷が重すぎることについては、「復沈幼丹制軍」光緒二年正月十二日（1876年2月6日）、『朋僚函稿』巻16、1～2頁。1876年3月7日〔光緒二年二月十二日〕の上諭は、李鴻章に対し呉賛誠が黎兆棠の何れかを選ぶように命じた。その上諭は、『海防档』乙、福州船廠、下冊、671頁。1876年初めに、丁が辞職し、黎兆棠を推挙したことについては、「復沈幼丹制軍」『朋僚函稿』巻16、5～6頁。黎兆棠に関する持論を覆して、呉賛誠を推薦したことについては、「復沈幼丹制軍」光緒二年三月十七日（1876年4月11日）、『朋僚函稿』巻16、12～13頁。『海防档』乙、福州船廠、下冊、686頁。丁日昌が福建巡撫の職を辞したことについては、「復沈幼丹制軍」『朋僚函稿』光緒二年十一月十四日（1876年12月29日）〔訳註：文海版で見当たらず〕。福建巡撫として丁日昌の後任となる呉賛誠に宛てて、黎兆棠が船政局の地位を引き継ぐことに疑念を表したのは、「復吳春帆京卿」『朋僚函稿』光緒四年四月初十日（1878年5月11日）、巻18、13～15頁。「復何筱宋制軍」光緒四年五月二十七日（1878年6月27日）、『朋僚函稿』巻18、16頁。「復沈幼丹制軍」光緒四年六月二十二日（1878年7月21日）、『朋僚函稿』巻18、16頁。呉賛誠が辞任する意向を示したことを惜しんだのは、「復李丹崖星使」光緒五年六月初九日（1879年7月27日）、『朋僚函稿』巻18、31頁。張夢元が呉賛誠の後を継ぐよう希望を表したのは、「復何筱宋制軍」光緒五年七月二十六日（1879年9月12日）、『朋僚函稿』巻18、36頁。名前を挙げてはいないが、左宗棠が後継者について関心を表した文書は、『海防档』乙、福州船廠、下冊、934頁。張夢元が任命された。スペクターは、その地位が「曾の忠実な後継者にして李の親しい同僚である沈葆楨の両手の内に落ちた1867年に、李鴻章が長官の選択に対し影響力を持ち始めたことを仄めかしている。Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, p. 173.

- 71) 註70で引用した呉賛誠及び何璟宛て書簡を参照のこと。また、「復沈幼丹制軍」光緒五年八月十一日（1879年9月26日）、『朋僚函稿』巻18、37～38頁。
- 72) 「復李丹崖星使」光緒六年二月二十日（1880年3月30日）、『朋僚函稿』巻19、10～12頁。調査を命じた上諭は、『海防档』乙、福州船廠、866頁、1880年12月17日。黎兆棠から総理衙門へ、『海防档』乙、福州船廠、871頁、1881年2月5日。
- 73) 「復黎召民京卿」光緒七年五月初四日（1881年5月31日）、『朋僚函稿』巻20、8頁。「復黎召民京卿」光緒七年六月二十日（1881年7月15日）、『朋僚函稿』巻20、11～12頁。『海防档』乙、福州船廠、下冊、892頁。
- 74) 福州船政局製の船を李鴻章が使用するについては、「復吳春帆京卿」光緒四年二月十六日（1878年3月19日）、『朋僚函稿』巻18、9～10頁。「復吳春帆京卿」光緒四年四月初十日（1878年5月11日）、『朋僚函稿』巻18、13～15頁。「復黎召民京卿」光緒八年九月二十八日（1882年11月8日）、『朋僚函稿』巻20、33～34頁。生産の改善に関する働きかけについては、「復吳春帆京卿」光緒二年八月二十三日（1876年10月10日）、『朋僚函稿』巻16、23～25頁。「復吳春帆京卿」光緒二年九月十四日（1876年10月30日）、『朋僚函稿』巻16、29～30頁。「復吳春帆京卿」光緒二年十月十五日（1876年11月30日）、『朋僚函稿』巻16、33～34頁。「復吳春帆京卿」光緒三年八月十五日（1877年9月21日）、『朋僚函稿』巻17、19～20頁。「復吳春帆京卿」光緒三年十月初六日（1877年11月11日）、『朋僚函稿』巻17、29～30頁。「復吳春帆京卿」光緒三年十月二十二日（1877年11月26日）、『朋僚函稿』巻17、32～33頁。「復吳春帆京卿」光緒三年十一月二十日（1877年12月24日）、『朋僚函稿』巻17、39～40頁。「復吳春帆京卿」光緒四年正月初八日（1878年2月9日）、『朋僚函稿』巻18、3～4頁。「復郭筠僊星使」光緒四年正月二十六日（1878年2月27日）、『朋僚函稿』巻18、5～7頁。「復黎召民京卿」光緒六年七月二十一日（1880年8月26日）、『朋僚函稿』巻19、28～29頁。「復黎召民廉訪」光緒六年十一月初二日（1880年12月3日）、『朋僚函稿』巻19、37頁。「復黎召民廉訪」光緒七年二月初二日（1881年3月1日）、『朋僚函稿』巻20、3～5頁。「復黎召民京卿」光緒八年九月二十八日（1882年11月8日）、『朋僚函稿』巻20、33～34頁。砲艦が引き渡される以前に、李鴻章は、最も集中的に関心を持っていたよ

うに思われる。

- 75) 1875年以来、李鴻章の書簡を通じて60件の問い合わせがあった。江南製造局の訓練については、『海防档』「江南製造局」輪船操練局（汽船訓練事業）、を参照。
- 76) 名前が判明しているのは、張成、嚴宗光（嚴復）、邱宝仁、呉世忠、鄧世昌、李和練、呉夢良、劉歩蟾、林泰曾、蔣超英、方伯謙、林永升、葉祖珪、黄建勛、林穎啓、Yang Tse-che（楊廉臣か？）である。李鴻章が劉歩蟾と邱宝仁に不審を抱いていたことについては（両者はのち日清戦争で不名誉な歴史を残した）、「復呉春帆京卿」光緒三年三月二十日（1877年5月3日）、『朋僚函稿』巻17、3～4頁、を参照のこと。〔訳註：この書簡の中で、李鴻章は、丁日昌は邱（宝仁）千総に対し「軟弱」であると不満の意を表したが、自分の意見は丁とほぼ同じであるとし、管帯は責任が重く、軽々しく試すことはできないので、丁が呉世忠等と共に人選を検討し直すのが望ましいとの所見を陳べている。なお劉歩蟾に関する言及は、この書簡ではなされていないようである。〕1881年に李鴻章は、他の者と共に劉歩蟾を称賛した。Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, p. 235.
- 77) 同上。Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, p. 235.
- 78) 「復黎召民廉訪」光緒七年二月初二日（1881年3月1日）、『朋僚函稿』巻20、3～5頁。黎兆棠の報告（1883年2月1日）については、『海防档』乙、福州船廠、935頁。Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p. 235、は、李鴻章が楊、李、呉に与えた報告が引用されている。張夢元の報告（1883年11月24日）は、『海防档』乙、福州船廠、998頁。
- 79) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, p. 236。「呉大澂」Hummel, *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, pp. 880-882（百瀬弘）。
- 80) 郭嵩燾ですら、かつては海外での海軍研修が有益であることに疑問を持っていた。Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, p. 101。また、「復郭筠僊星使」光緒三年六月初一日（1877年7月11日）、『朋僚函稿』巻17、12～15頁。曾紀沢は、かような訓練は無益であるとまで言った。「復曾劄剛星使」光緒五年六月初九日（1879年7月27日）、光緒五年六月二十八日（1879年8月15日）〔訳註：曾紀沢が李鴻章との間で、留学生に関する記事が見られるのは、同年七月初八日付のもの（『朋僚函稿』巻18、35～36頁）。〕
- 81) 李鴻章は、呉賛誠がお望みの補佐官を派遣するのを遠回しに断った。「復沈幼丹制軍」光緒四年六月二十二日（1878年7月21日）、『朋僚函稿』巻18、16頁。李鴻章が解任された福州船政局の紳士の一人（その人物は、李の試みに反し、個人秘書として黎兆棠に仕え続けた）を雇おうと企てたことについては、「黎兆棠から総理衙門へ」（1880年7月6日）、『海防档』乙、福州船廠、856～858頁、及び「復黎召民京卿」光緒六年七月二十一日、『朋僚函稿』巻19、28～29頁。李鴻章の艦長の帰還については、「復沈幼丹制軍」（光緒五年十月十七日）『朋僚函稿』巻19、4頁。劉歩蟾と林泰曾が、李鴻章の下に戻った。
- 82) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, pp. 229-232.
- 83) 学生は、劉歩蟾、林泰曾、魏瀚、陳兆翱、陳季同であった。張成も、その可能性がある。池仲祐『海軍大事記』（326頁）に、張成の名前を含まないリストが載せられているが、丁日昌は1876年の上奏文の中で、張成が外国にいたとした（『船政奏議彙編』巻13、19頁）。1875年5月17日付、沈葆楨の報告も併せて参照のこと（『海防档』乙、福州船廠、553頁）。池仲祐『海軍大事記』（327頁）は、魏瀚と陳兆翱がヨーロッパに滞在していたことについて陳べる。
- 84) 李成謀から羅大春への交替については、1873年2月8日〔同治十二年正月十一日〕の上諭に拠る。『海防档』乙、福州船廠、上冊、417頁、を参照のこと。蔡国祥については、1875年4月9日付、沈葆楨の上奏文に拠る。『海防档』乙、福州船廠、下冊、552頁、を参照のこと。楊武については、『船政奏議彙編』巻12、7頁、を参照のこと。併せてShore, *The Flight of Lapwing*, pp. 226-240、も参照のこと。
- 85) 呉世忠については、丁日昌から総理衙門へ（1876年3月5日）、『海防档』乙、福州船廠、下冊、

- 669頁。（その年の8月まで、訓練に関する幹部候補生は、常備船員より良質であると報告された。『海防档』乙、福州船廠、下冊、695頁。）批評については、沈葆楨から総理衙門へ（1876年3月5日）、『海防档』乙、福州船廠、下冊、663頁。
- 86) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, pp. 232-234.
- 87) 吳贊誠の総理衙門に宛てた報告（1876年11月11日と1877年6月17日）は、『海防档』乙、福州船廠、下冊、704頁、733頁。江南製造局の訓練船海安の旅程については、沈葆楨の上奏文（1876年11月9日）『海防档』「江南製造局」141頁、参照。
- 88) 郭嵩燾と曾紀沢の異論については、註80を参照のこと。曾紀沢の動機に関する何璟と黎兆棠の主張を引用しているのは、「復李丹崖星使」光緒六年八月十七日、『朋僚函稿』巻19、30～31頁。
- 89) 「復沈幼丹制軍」光緒四年九月二十八日、『朋僚函稿』巻18、21頁。〔原文：「……張成為四礮船管駕之尤雄者。洋弁甫經裁遣操練，必須得人礙難遽離戲下，船政舊人尚多，北洋此等材武極少。幸毋奪我另與春翁商調為感。」〕
- 90) 1880年12月17日の上諭は、訓令と共に、委員会の設置を命じる。『海防档』乙、福州船廠、下冊、866頁。軍機大臣及び総理衙門に対する何璟の返答は、同、890頁（1881年4月9日）。
- 91) Shore, *The Flight of Lapwing*, pp. 60-61. 「教練」に関する彼の手記は、pp. 79-80, p. 80, p. 139を参照のこと。
- 92) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, p. 236.
- 93) 張佩綸の上奏文は、『船政奏議彙編』巻26、20～21頁。Biggerstaff, *The Earliest Modern Government School in China*, p. 217, p. 226, pp. 236～237, も併せて参照のこと。
- 94) 西洋での専門家の地位に関する李鴻章の考えについては、Teng and Fairbank, *China's Response to the West*, pp. 70-72. 日本人についてのコメントは、『籌辦夷務始末』同治、巻55、25頁。C. E. M. については、『籌辦夷務始末』巻82、47～48頁。帰国した学生の多くが海軍の業務に入ったことについては、LaFargue の12～13頁、29～31頁、リストは、173～176頁。
- 95) 試験制度については、李鴻章の1874年上奏のBiggerstaffによる要約を参照（26～27頁）。ウェストポイントの問題については、Avery から Fish へ、FRUS (1875), I, 227.
- 96) 許鈴身については、包遵彭『中国海軍史』（台北、1951年）、138頁。『清史稿』兵志。池仲祐『海軍大事記』327頁。〔訳註：このとき許鈴身が率いた4隻の砲艦は、「龍驤」「虎威」「飛霆」「策電」である。〕
- 97) 吳贊誠の輪船招商局との関わりについては、『海防档』乙、福州船廠、下冊、686頁、を参照のこと。吳が天津機器局で地位を得たことについては、「復黎召民京師」光緒六年七月二十一日、『朋僚函稿』巻19、28～29頁。嚴復については、「復黎召民京師」光緒六年三月二十日、『朋僚函稿』巻19、19～20頁。池仲祐『海軍大事記』329頁は、天津に吳〔嚴の誤りか〕がいたことを記録している。
- 98) L. C. Arlington, *Through the Dragon's Eyes* (London, 1931), p. 13.
- 99) 包遵彭『中国海軍史』（台北、1951年）、231～232頁。
- 100) 声明は翻訳され、1882年12月12日付、Young to Frelinghausen, FRUS (1883), p. 169. に載せられた。
- 101) 「復孫藁田讀学」光緒八年七月初二日（1882年8月15日）、『朋僚函稿』巻20、27～28頁。Spector, *Li Hung-chang and the Huai Army*, p. 402. は、李鴻章の学堂は、「中国海軍」の中に福州の要素を補うことが意図されたと述べる。
- 102) 池仲祐『海軍大事記』329～330頁。外国人指導者のうち一人が、出席した。
- 103) シューフェルトの論評については、Clyde, *United States Policy Toward China*, p. 163. を参照のこと。学生獲得競争に関する論評は、池仲祐『海軍大事記』328頁。
- 104) Clyde, *United States Policy Toward China*, p. 163.
- 105) Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, pp. 479-480.
- 106) Arlington, *Through the Dragon's Eyes*, pp. 14-15. アーリントンは、そのドイツ人を「キャプテ

ン・エス」 と呼んでいる。その名前については、James H. Wilson, *China: Travels and Investigations in the Middle Kingdom*, 3rd ed., red. (New York, 1901), p. 73.

- 107) Biggerstaff, *The Earliest Modern Government Schools in China*, p. 52, は、清仏戦争以前に船員の卒業生が何名いたかを教えてくれる。LaFarge, *China's First Hundred*, p. 74, は、馬江の役で、艦長の中に前 C. E. M. “ボーイズ” がいたが、既知の名前は、広東語によるローマ字で表記されているだけなので、どんなに想像力をたくましくしても、中国語史料の中にある中国人艦長さんえいの名前と符合することができないと陳べている。海上での経験をもつ水師の副官 (lieutenant) は、金榮きんえいであった（『清季外交史料』巻56, 37頁）。

- 108) Shore, *The Flight of the Lapwing*, pp. 56-57.